

南宮遺跡 III

—南長野運動公園総合球技場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023年11月

長野市教育委員会

南宮遺跡 III

—南長野運動公園総合球技場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023年11月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしづくりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第171集として刊行いたします本書は、南長野運動公園総合球技場整備事業に伴って実施した、南宮遺跡に関する調査報告書であります。

発掘調査では、平安時代の住居址などが検出されており、この地にかけて展開した古代の集落を考察するうえで重要な資料が得られております。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていたいただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

2023年11月

長野市教育委員会
教育長 丸山 陽一

例　言

- 1 本書は、「南長野運動公園総合球技場整備事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）が実施した。
- 3 調査地は、長野県長野市篠ノ井東福寺 320 外に所在する。調査面積は 3,000m²である。
- 4 発掘調査は、平成 25 年 10 月 28 日から 12 月 9 日にかけて実施した。また、整理調査及び報告書刊行にいたる業務は令和 4 ～ 5 年度に行った。
- 5 本書の編集・執筆は第 2 章を青木一男が、それ以外を千野 浩が担当したが、第 4 章は鳥羽英継氏に玉稿を賜った。記して感謝申し上げる。
- 6 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。なお、本調査の略記号は、「NNG2013」である。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要點は下記のとおりである。

- 1 本書では、検出された遺構のうちで時期・性格等が明らかなものを中心に報告した。
- 2 遺構図の方位は座標北を表している。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第VII系（東経 $138^{\circ} 30' 00''$ 、北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ ）の座標値（日本測地系 2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。
- 4 遺構名は、種別ごとに下記の略記号を用いて通し番号を付した。
竪穴住居址…S B、溝址…S D、土坑…S K、性格不明遺構…S X
- 5 遺構実測図は、1/20 で作成した原図をもとに、竪穴住居址・溝址 1/80 で掲載した。
- 6 遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに、1/4 で掲載した。
- 7 遺物写真的縮尺は任意である。
- 8 土器実測図において、断面の黒塗りは須恵器、■は灰釉陶器を表す。また、器面の■は黒色処理の範囲を表す。

目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の体制	3
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 犀川扇状地の地理的環境	4
第2節 犀川扇状地の考古学的調査	4
第3章 調査	8
第4章 南宮遺跡の消長	28

挿図目次

図1 調査地位置図	5	図15 4号住居址・出土土器実測図	18
図2 調査地周辺遺跡分布図	6	図16 5号住居址実測図	19
図3 南宮遺跡の調査	9	図17 7号住居址実測図	19
図4 調査区全測図	11	図18 6号住居址・出土土器実測図	19
図5 北側スタンド地点全測図①	12	図19 7号住居址出土土器実測図	20
図6 北側スタンド地点全測図②	13	図20 8号住居址・出土土器実測図	20
図7 メインスタンド地点全測図	14	図21 9号住居址・出土土器実測図	20
図8 1号住居址実測図	16	図22 11号住居址・出土土器実測図	20
図9 1号住居址カマド実測図	16	図23 10号住居址・出土土器実測図	21
図10 1号住居址出土土器実測図	17	図24 12号住居址・出土土器実測図	21
図11 2号住居址実測図	17	図25 13・16・17号住居址実測図・13号住居址出土 土器実測図	22
図12 3号住居址実測図	17	図26 15号住居址・カマド・出土土器実測図	22
図13 2号住居址出土土器実測図	17	図27 その他遺構・検出面出土土器実測図	23
図14 3号住居址出土土器実測図	18		

表目次

表1 検出遺構一覧表	15	表2 出出土器観察表	24
------------------	----	------------------	----

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

長野市の川中島町御厨と篠ノ井東福寺が接する畑作地一帯は、1990（平成2）年11月に長野市教育委員会（以下、市教委）長野市埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が実施した市道五明西寺尾線建設工事に先立つ現地踏査と試掘調査によって埋蔵文化財の包蔵が確認された地域であり、埋蔵文化財包蔵地は調査地の小字名を冠して南宮遺跡と命名されている。

1991（平成3）年6月15日国際オリンピック委員会（IOC）のバーミンガム総会において1998（平成10）年の第18回オリンピック冬季大会の開催都市として長野市が決定され、これを契機にオリンピック開催に向けての準備が本格化した。新幹線や高速道路の整備を始めとして、長野市とその周辺地域は空前の開発ラッシュとなっていましたが、印象的にはバブル崩壊後も開発の波は衰えなかった、という表現が正鶴を射ている。

長野五輪の閉会式場となるオリンピックスタジアムの建設を主とする南長野運動公園の整備が計画され、埋文センターが現地踏査及び試掘調査を実施したところ、公園予定地内に約9ヘクタールにおよぶ平安時代の遺跡が存在することが判明した。このうち遺跡への影響が排除できない範囲約6ヘクタールを対象に、1993（平成5）年から1996（平成8）年にかけて4年の年月をかけた発掘調査を実施した。調査では、1,000軒以上の堅穴住居址や地鎮祭遺構、鍛冶関係遺構などを検出し、出土遺物も多岐にわたり量が多く、9世紀初頭に出現し10世紀代にピークを迎える11世紀後半には消滅する、平安時代単一の巨大な集落遺跡であることが判明した。このような未曾有の大規模発掘調査であったにもかかわらず、長野オリンピックの開催までに間に合わせることができたのは、「文化の祭典は文化財の保護から」を合言葉に、開発関係部局や工事関係者との綿密な調整によって成し得たものであり、偏に関係者の並々ならぬ努力があったからに他ならない。

長野五輪終了後は、聖火台がモニュメントとして残されるなどオリンピックレガシィのある公園として市民に親しまれてきたが、スポーツ振興ムーブメントの一拠点とするべく6,000人収容規模の天然芝サッカー・ラグビー場（約148m×74m）の建設が計画され、2002（平成14）年に完成した。実はこの施設の建設に先立ち、2001（平成13）年6月に予定地において埋文センターが発掘調査を開始したところ、雨水排水水管設工事によって既に埋蔵文化財が破壊されていることが判明した。この件は文化財保護法第94条の規定に抵触する可能性があるため、詳細について長野市都市開発部（現、都市整備部）公園緑地課（以下、公園緑地課）に問い合わせたところ、同年7月17日付「埋蔵文化財発掘調査予定箇所における工事経過について（報告）」が提出された。これによると、①平成6年度の発掘調査予定範囲だった場所（後に長野五輪終了後の調査箇所に変更された）であること、②工事を外部団体に委託していたこと等、の理由により、既に埋蔵文化財に関する手続きが終了しているものと後任の担当者が勘違いしてしまったことが原因であるらしい。市教委としては、同年8月3日付「南長野運動公園建設地における埋蔵文化財包蔵地の保護について」をもって、遺憾の意を伝達するとともに、以後適正な手続きを講ずるよう強く要請している。



写真1 建設中のオリンピックスタジアムと発掘調査地

このサッカー・ラグビー場は南長野運動公園総合球技場（以下、スタジアム）として整備され、その後2007年（平成19）年に誕生した長野地域を拠点とするプロサッカーチームのAC長野パルセイロのホームスタジアムとして利用されてきた。2010（平成22）年12月に北信越リーグから日本フットボールリーグ（JFL）への入会が認められたAC長野パルセイロは、その後の活躍により2012（平成24）年7月にJリーグ準加盟クラブとして承認されたものの、ホームとして登録したスタジアムがJリーグ規格に満たなかったため、J2ライセンスの申請を見送った経緯がある。サッカーファンのみならず市民からの熱烈な要望を受けた長野市は、J2仕様の1万人ではなく、J1仕様の1万5千人収容規模とするスタジアム改修計画を同年8月に発表した。そして、AC長野パルセイロは2013（平成25）年11月に日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）への入会と翌年からのJ3リーグへの参加が認められたのである。

この本格的な改修計画に伴う埋蔵文化財の保護に関する協議の初源は、2012（平成24）年2月23日に遡る。担当課の一つである市教委体育課の担当者との協議では、「長野市長は、最低でも2016（平成28）年のシーズンに間に合うよう、それより1年でも2年でも早くできるよう府内の検討を命じた。」とのことであった。建設工事を担当する公園緑地課（体育課は完成後の管理を担当）としては、既に埋蔵文化財に関する手続きは終了しているのでは？との認識であったが、市教委からは「当時の公園造成工事によって遺構が破壊されない場合は、盛土なりを施しながら現地でそのまま保存されているはずであり、何らかの掘削を伴う新たな開発行為が浮上した場合は、その都度埋蔵文化財保護協議が必要となる。」旨を伝達している。

その後、発掘調査の実施について保護協議を重ねていくこととなったが、スタジアムの設計・施工については公募型プロポーザル方式が採用され、事業費約71億4千万円で当初想定より8か月の工期短縮を提案した竹中工務店・東畑建築事務所・北信土建・千広建設・アーキプランの共同企業体（以下、JV）が2013（平成25）年2月に選定された。同年4月からはJVも交えた形で保護協議を実施し、記録保存の対象となる範囲について調整することになった。具体的には、構造物の基礎となる部分の掘削深度及び地盤改良の深度と、埋蔵文化財包含層の有無及び深さとの関係性が課題となつたため、適宜試掘調査を実施して範囲と深さについて調整を図った。その結果、起因となる開発事業「南長野運動公園総合球技場整備事業」の事業面積約11,150m²の全域を保護対象とし、そのうち埋蔵文化財への影響が懸念される1,500m²以上を発掘調査し、記録保存を図ることが確認された。発掘調査の実施に際しては、8月から始まる現スタジアムの解体工事が終了する10月後半から開始するものとし、遺構の存在が確定な北側スタンド部分（約1,000m²）から始め、西側のメインスタンド部分については、盛土除去後に実施予定の試掘調査の結果次第（遺構の存在範囲500～2,000m²）とすることになった。

2013（平成25）年9月2日付第162号で文化財保護法第94条の規定に基づく通知書が長野市長（公園緑地課担当）から提出され、市教委からは同年9月6日付25埋第3-17号で保護措置「発掘調査」を勧告している。発掘調査は、埋文センターが同年10月28日から12月10日までの44日間実施し、3,000m²の実質調査面積の範囲に、堅穴建物址19軒、溝址14条、土坑10基、井戸址1基、小穴多数を検出、主に10～11世紀の平安時代の集落跡であることが明らかとなった。

発掘調査終了後の2014（平成16）年1月からは建設工事が本格化し、2015（平成27）年3月にスタジアムが竣工、2016（平成28）年11月には公募した愛称の「長野Uスタジアム」が発表され、2017（平成29）年シーズンからAC長野パルセイロ及びレディースのホームスタジアムとしてこの名称が使用されている。

その後の整理調査については、その他の開発事業に伴う発掘調査を優先する形で細々と行ってきたため、予想外の時間がかかってしまったが、2023（令和5）年に本書を刊行して、すべての保護措置が終了した。

第2節 調査の体制

発掘調査は長野市教育委員会の直轄事業として、長野市埋蔵文化財センターが平成25年に実施した。しかし、諸般の事情から整理作業・報告書作成作業は令和4～5年度に実施している。組織は以下のとおりである。

平成25年度

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	堀内征治
統括責任者	長野市教育委員会	教育次長	藤沢孝司
統括管理者	長野市教育委員会文化財課	課長	青木和明
統括責任者	長野市埋蔵文化財センター	所長	小山敏夫
	(庶務担当)	係長	河口英明
		職員	大竹千春
	(調査担当)	係長	飯島哲也
		主査	小林和子
		主事	塚原秀之
		専門員	柳生俊樹 高田亜紀子 平林大樹 田中暁穂
			遠藤恵実子 日下恵一 篠井ちひろ

発掘調査員 矢口忠良

発掘作業員 青木仁子 大久保文代 大日向謙一 坂口修一 白石幸夫 寺沢君夫 寺沢真弓 三浦英光
富岡 茂 北原周治 山崎孝之 小林優心

令和4～5年度

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	丸山陽一
統括責任者	長野市教育委員会	教育次長	藤澤勝彦
統括管理者	長野市教育委員会文化財課	課長	前島 卓（～R4）石坂陽子（R5～）
統括責任者	長野市埋蔵文化財センター	主幹兼所長	大井久幸（～R4）飯島哲也（R5～）
調査担当者	長野市埋蔵文化財センター	課長補佐	飯島哲也（～R4） 課長補佐 風間栄一
調査機関	埋蔵文化財センター庶務担当	所長補佐	伊藤慶順（R5～） 事務職員 宮本博夫 平林満美子
		調査担当	主査 小林和子 鹿田斐之 研究員 田中暁穂 清水竜太 井出靖夫 青木一男 鈴木時男（～R4）山岸龍二（R5～） 越志忍沙（R5～） 千野 浩
発掘調査員	向山純子		
発掘補助員	後藤大地		
整理調査員	青木善子 市川ちづ子 烏羽徳子 半田純子		
整理作業員	飯島早苗 清水さゆり 西尾千枝 待井かおる 三好明子 宮島恵子		

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 扇川扇状地の地理的環境

信濃川水系の犀川は、松本盆地・安曇野市付近（標高520m）で西部山地（犀川丘陵帶）[図2-X]を東に蛇行しながら侵食して流下し、長野盆地北西部の長野市犀口[A]（標高362m）で盆地部に放流される。犀川の活発な堆積作用は、長野盆地南部に大規模な犀川扇状地を形成した。

犀川扇状地は長野盆地南部の犀川と千曲川に挟まれた地域で、当地方では通称「川中島」と呼ばれてきた地域である。犀川の盆地入口部・長野市小松原・犀口[A]（標高362m）から犀川と千曲川の合流点・長野市落合橋[B]（標高338m）までの距離は10.5km、標高差24mで、河床勾配 $2.6/1000$ 。一方、千曲川の盆地入口部・千曲市栗佐橋[C]（標高355m）から犀川と千曲川の合流点・長野市落合橋までの距離は17.5km。標高差17mで、河床勾配 $1.0/1000$ 。犀川は千曲川に比べて急勾配で、堆積作用が盛んである。そのため、千曲川は千曲市周辺で長野盆地に流入すると、犀川扇状地に押されるかたちで、流路を北から北東方面に変え、河東山地[Y]の縁辺を長野盆地北東方面に緩やかに下ることになる。

犀川扇状地は、 $4/1000$ という緩やかな勾配が犀口を扇頂として同心円状に広がり、右側は西部山地、左側は裾花川扇状地によって押さえられている。扇状地の起伏は、傾斜方向の北西から南東方向を中心に放射状に配列する。旧河道の痕跡に由来する微高地と、河道の中州や洪水氾濫時の堆積によって形成された自然堤防に由来する微高地が網目状に展開する。扇状地上の土地利用は、微高地に集落や果樹園が、微低地に水田が広がる。

犀川扇状地は長野盆地の豊かな穀倉地で、古代北信濃四郡のうち更級郡の北東部が位置し、今日では長野市南部の市街地化が及んでいる。扇頂部には現長野市川中島地区[図2-D]が、扇央部には東から現長野市青木島[E]、福島[F]、御厨[G]、中津[H]地区が、扇状地端部は千曲川を境界に旧埴科郡域に接し、東から現長野市真島[I]、小島田[J]、東福寺[K]、篠ノ井[L]地区が広がっている。

市街化がすすんでいる犀川扇状地の諸地域であるが、裏作に小麦生産を行う二毛作地域として、川中島白桃をブランドにもつ果樹栽培地域として長野盆地の中核農業生産地でもあった。犀川扇状地の灌漑用水は、犀口付近で犀川から取水され、近世初期に整備されたとされ、上堰、中堰、下堰、鶴沢堰、小山堰の5系統が穀倉地域を開拓してきた。

第2節 扇川扇状地の考古学的調査

犀川扇状地内における発掘調査は、1978～1979（昭和53～54）年、長野市小島田地籍での国道18号線篠ノ井バイパス建設に伴う調査が初回である。堅穴住居30軒、土壙8基、溝渠3条が調査された[図2-4]。森嶋稔は、報告書「第4章 結語—田中沖遺跡調査の提起するもの—」（矢口忠良、森嶋稔ほか 1980年『田中沖遺跡—国道18号線篠ノ井バイパス緊急発掘調査報告書』）で、古墳時代中期の土壙内出土土器から農耕祭祀埋納土壙を想定し、調査できた30軒の堅穴住居は、古墳時代後期の集落が6世紀から出現し7世紀に核がある集落であること、平安時代の集落がその後半期に位置づくと整理した。古墳時代については大室古墳群築造期の犀川扇状地の地域社会、平安時代については犀川扇状地内に存在したであろう女房、池、氷泡等3郷から御厨支配下の集落遺跡への転換、在地豪族の変化を予察した。

田中沖遺跡の古墳・平安時代集落の背景に犀川扇状地の高い農業生産力を評価した森嶋は、「そうした歴史環境の中にあってもなお、この川中島扇状地における遺跡数はあまりにも少ない。堆積土量の薄くなる扇端部のみ



図1 調査地位置図 (1 : 10000)

に遺跡が明らかになっているという現実をみると、やはりその埋蔵されている量の大きさを推定することができることと堆積作用が大きな犀川扇状地に埋没する周知されていない遺跡群の存在を予察した。

1990（平成2）年、長野市篠ノ井東福寺地籍にて、市道五明西寺尾線建設にともなう南宮遺跡の発掘調査【1】（南宮遺跡I）が行われ、平安時代住居址26軒、土壙6基、溝渠8条の遺構、石説、白磁碗等の遺物が明らかとなった（矢口忠良ほか 1992年『南宮遺跡』長野市教育委員会）。犀川扇状地扇端部・南宮遺跡の調査は、長野オリンピック開閉会式場（現オリンピックスタジアム）と南長野運動公園建設に伴う平成5年から8年の約6ヘクタールの発掘調査【図2-1】につながり、平安時代の堅穴住居址1014軒が検出され、時期が判明した堅穴住居址は754軒に及んだ（矢口忠良ほか 2000年『南宮遺跡II—南長野運動公園建設地—』長野市教育委員会）。調査を担当した矢口忠良、矢口栄子、土器の分析を行った鳥羽英雄によれば、南宮遺跡のムラは、9世紀はじめに堅穴住居址が確認され、9世紀後半に増加するとともに方形区画が出現、10世紀前半には住居数（時期判定ができる堅穴住居址219軒）が著しく増加するという。方形区画内には、大型住居や祭祀用具と想定される器や銅製品が集中し有力者の存在が想定されてきた。集落構造は、10世紀後半には河道大溝が埋没し、時期判定できる堅穴住居址が219軒から48軒に減少し、方形区画の集落中心区画も失うという。11世紀前半には8軒が確認できるが11世紀後半には消滅する（矢口忠良 2003年『南宮遺跡』『長野市誌』第十二巻資料編 原始・古代・中世 長野市誌刊行会）。

矢口忠良は、南宮遺跡の成立について、出土石説が9世紀末から10世紀前半に比定できることから、「権力者配置による政治的目的・意図をもって集落がつくられた可能性がある」と指摘する（矢口 2003年）。一方、傳田伊史は、文献に登場する仁和の災害に関する記録と、発掘調査によって長野盆地南部に検出されるいわゆる仁和洪水痕跡から「仁和3年から仁和4年にかけての災害は、その規模といい、範囲といい信濃國に甚大な被

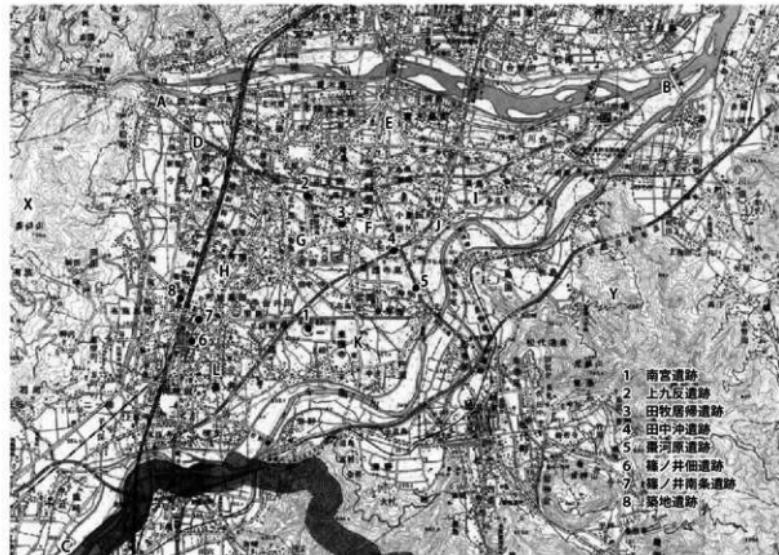


図2 調査地周辺遺跡分布図

害をもたらしたと推定される。」とし、最も被害を受けた更級・埴科郡のうち、更級郡内で、篠ノ井遺跡群と南宮遺跡の7世紀から11世紀の堅穴住居址数を比較検討した。洪水の直接被害を受けた篠ノ井遺跡群が9世紀後半から激減することに対して、南宮遺跡が10世紀前半に急速な増加傾向を示すことについて、洪水被災地域からの人々の移動、入植、開発を想定した。「洪水被害が甚大であった地域の人々は、安全とこれからの生活維持を求めて他所へ移動したとみるのが自然であろう。おそらく、そのような人々の移動先の一つが南宮遺跡であったのではないかと考えられる。」(傳田伊史 2017年「第III部 信濃國の災害と地域変動」「古代信濃の地域社会構造」同成社 古代史選書24)と災害を契機とした犀川扇状地内の地域社会の変動を想定した。

田中沖遺跡の調査を発端に、南宮遺跡の大規模発掘調査によって注目された犀川扇状地内の考古学調査は、長野市埋蔵文化財センターによる公共・民間開発に対応する事業、県埋蔵文化財センターによる北陸新幹線に対応する事業について実施されてきている。調査された遺跡の時期は古墳時代以降であり、集落として確認できるのは古墳時代後期以降で、その中核は古代平安時代集落である。各集落は、犀川扇状地内を南東方向に流下する河道沿いに、網目状の微高地上に展開する。上九反遺跡[2] (川中島町御厨)・田牧居郷遺跡[3] (稻里町田牧)・田中沖遺跡I・II・III ([4] 小島田町田中)・棗河原遺跡 (篠ノ井西寺尾)[5] は、扇状地扇央から先端にむけて南東方向広がっている。南宮遺跡[1] (篠ノ井東福寺)、篠ノ井佃遺跡[6] (篠ノ井布施高田)、篠ノ井南条遺跡[7] (篠ノ井布施高田)、築地遺跡[8] (篠ノ井布施高田)は、犀川犀口から千曲川にむけて南下する旧河道沿いの扇状地右翼側に展開する。しかしながら、これまでに、扇頂付近の川中島地籍[D]、現在の犀川に沿った扇状地左翼側の青木島地籍[E]、真島地籍[I]に遺跡の調査例はない。遺跡がないものか、埋没しているものなのか、あるいは犀川によって流されてしまったものなのか、想定すらできないのが現状である。

鳥羽英継はこれらの発掘調査で得られた情報を整理し、各集落の消長を分析した。(鳥羽英継 2006年「古代における川中島扇状地の開発—長野市南宮遺跡発見のほぼ一町単位の空白帯を手がかりにして—」『長野県考古学会誌』114 長野県考古学会)。鳥羽の分析は、犀川扇状地に集落が形成されるのは古墳時代後期の6世紀後半から7世紀初頭で、田中沖遺跡がその中核集落であるという。「川中島扇状地全体に開免が始まるのは9世紀代である。」とする鳥羽は、南宮遺跡の集落構成の変化に条里型地割による規制を見出し、9世紀後半～10世紀中ごろには南宮遺跡周辺に条里造営や開発がすすんだと想定した。それを裏づけるように、犀川扇状地の堅穴住居跡のピークは10世紀前半に認めることができる。現状の発掘調査例からは、犀川扇状地の集落動向や開発を読み取ることは難しい。

9世紀に堅穴住居が出現し、9世紀末から10世紀にかけて堅穴住居の増加傾向が認められそうな遺跡に、令和3年から調査が継続している篠ノ井佃[6]・南条[7] 遺跡がある。網目状の旧河道低地帯と微高地の境界付近に調査が及んでおり、低地帯では水田畔壁は確認できないが、何枚もの鉄分集積層や水路が確認できる。今後の篠ノ井佃・南条遺跡の発掘調査では、下層水田層の時期判定や水路の構造等といった目的意識をもった考古学的調査が期待される。そうすることによって、斗女郷周辺の水田開発景観が復元されることになるだろう。

堆積作用が激しい広大な犀川扇状地内の発掘調査数は多いわけではなく、遺跡数も未知数であることはかつて森崎稔が指摘した通りである。それゆえに当扇状地における歴史解釈も、南宮遺跡を様々な角度から分析してきた鳥羽英継らの追究姿勢に学び、常識を疑いつつ新視覚を取り入れながら分析していく必要があろう。同時に、犀川扇状地の開発に考古学的に迫れるよう、視点ある発掘調査・整理作業を積み上げていく必要がある。そうすることによって、犀川扇状地の高い農業生産力を評価した森崎稔、矢口忠良らの視点に学び、当該地域の開発史を考古学的に紐解くことができよう。

第3章 調査

調査は南長野運動公園総合球技場建設に伴うもので、試掘調査に伴い遺構の存在が確認された北側スタンド部分ならびに西側のメインスタンド部分の一部について実施した。実質調査面積は3,000m²である。

確實なもので、住居址17軒、土壙10基、井戸址1基、溝址15基、性格不明遺構2基を検出している。

西側のメインスタンド部分は攪乱の影響が大きくおよび詳細不明な部分が多いが、調査区西北から南東にかけて旧流路が2本検出されており、今後遺跡範囲の想定に一つの根拠を与えるものとなろう。住居址の可能性も考えられる2つの竪穴状遺構(SB18・SB19)とともに4本の溝址(SD12～15)、土壙1基(SK10)、性格不明遺構1基(SX2)が検出されているが、遺構の密集度は低い。溝址SD12～14は検出された旧流路と並走しており、何らかの関連が想定できるかもしれない。

北側スタンド部分では住居址15軒、土壙9基、溝址10本、性格不明遺構1基を検出している。住居址は中世遺構と想定される12号住居址以外はいずれも平安期の住居と想定されるが、時期の明確なものを屋代編年(長野県埋蔵文化財センター2000)に対応させる古代9期(SB3)、古代10期(SB2・4・6・7)、古代13期(SB1・10)となり、遺跡の中心は古代10期にあるようである。住居址規模は一辺4.0～4.5mと小型のものが主体を占める。6号住居址は5.30×7.05mとやや住居址規模が大きいが出土遺物等から優位性が認められるわけではない。13号住居址と15号住居址を結ぶラインから以南は遺構の密度が激減して空白域を形成し、調査地は該期集落の南端付近に位置することが想定される。



写真2 調査地遠景

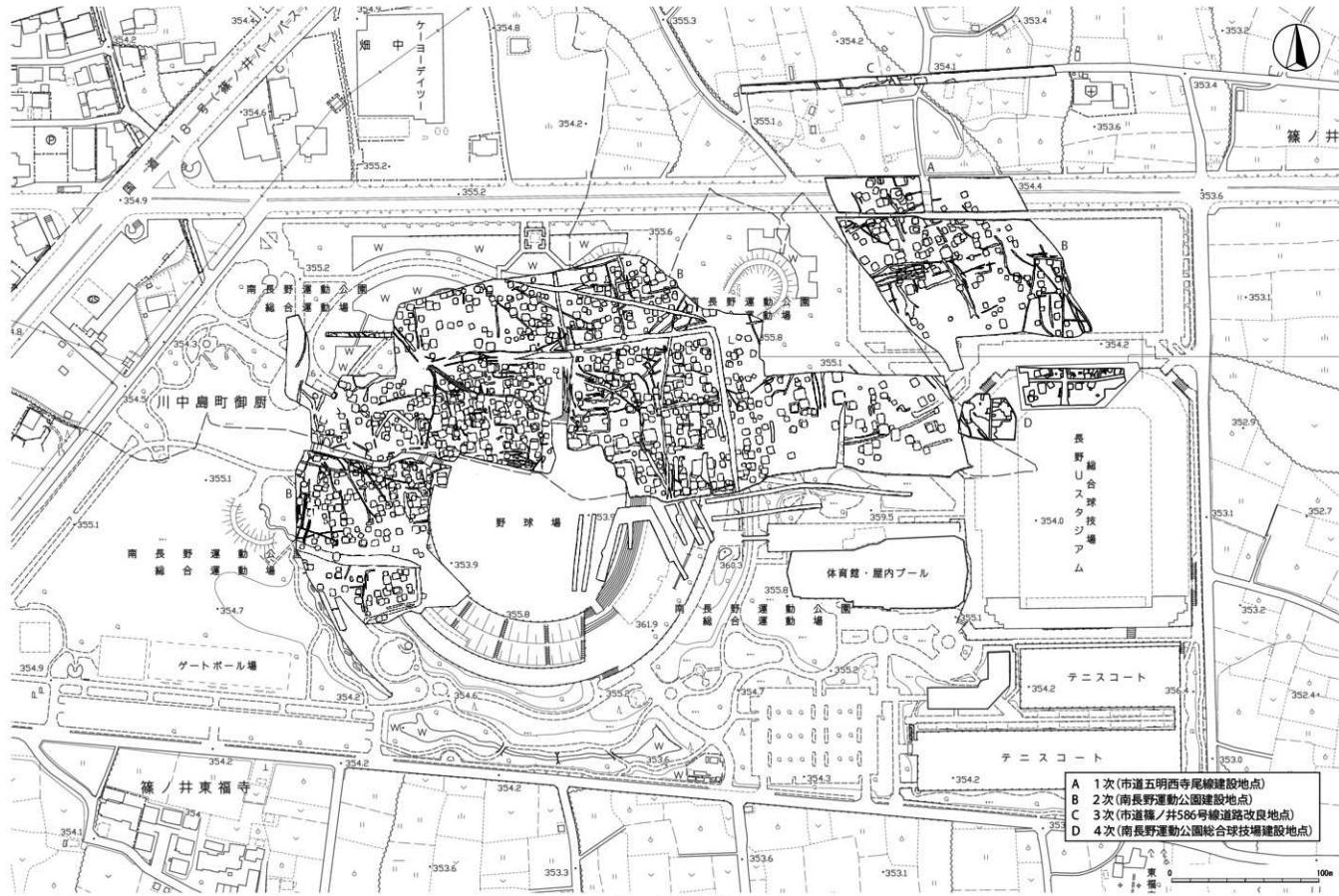


図3 南宮遺跡の調査

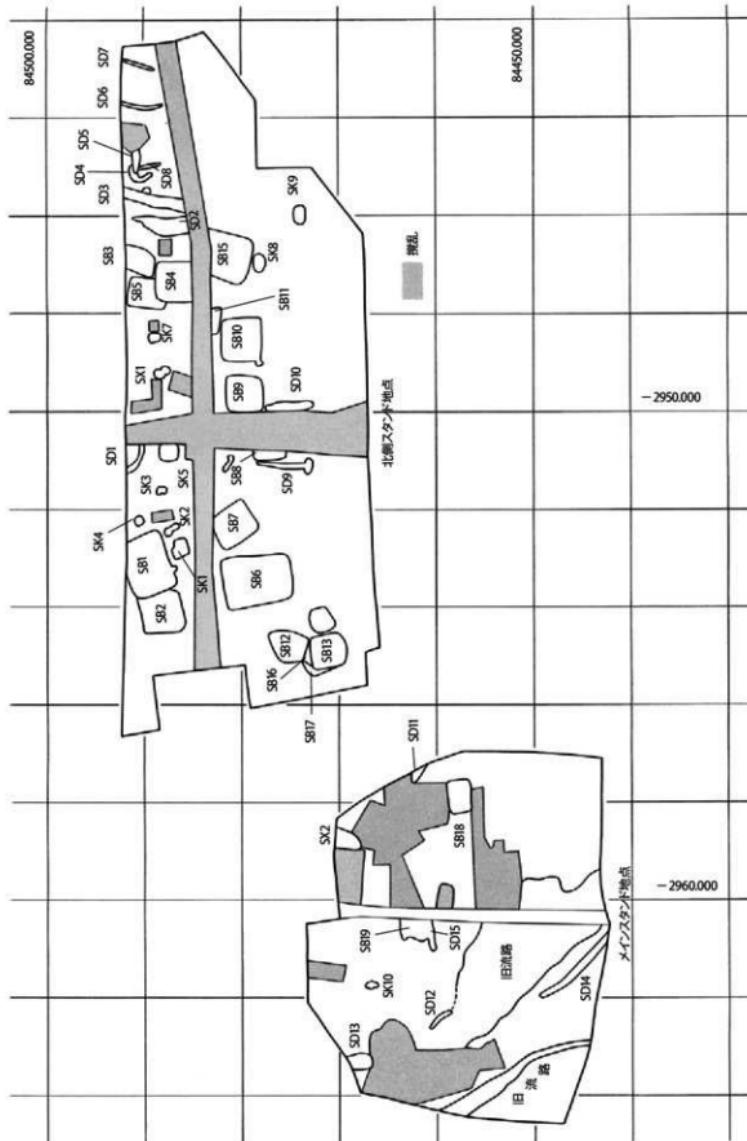


図4 調査区全測図 (1 : 500)

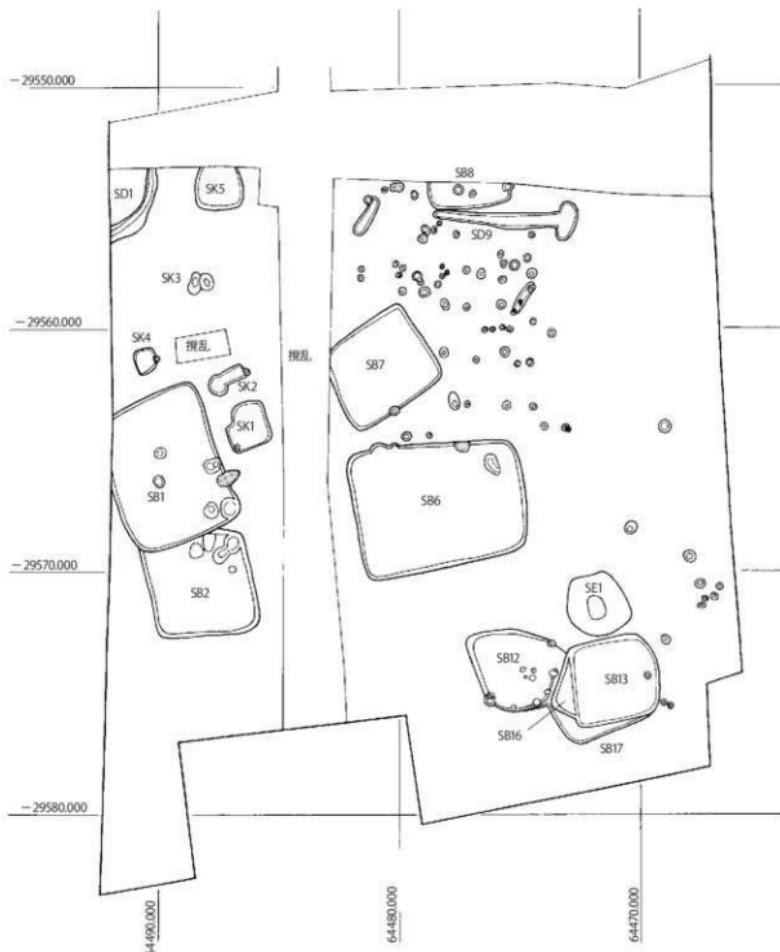


図5 北側スタンド地点全測図① (1:200)

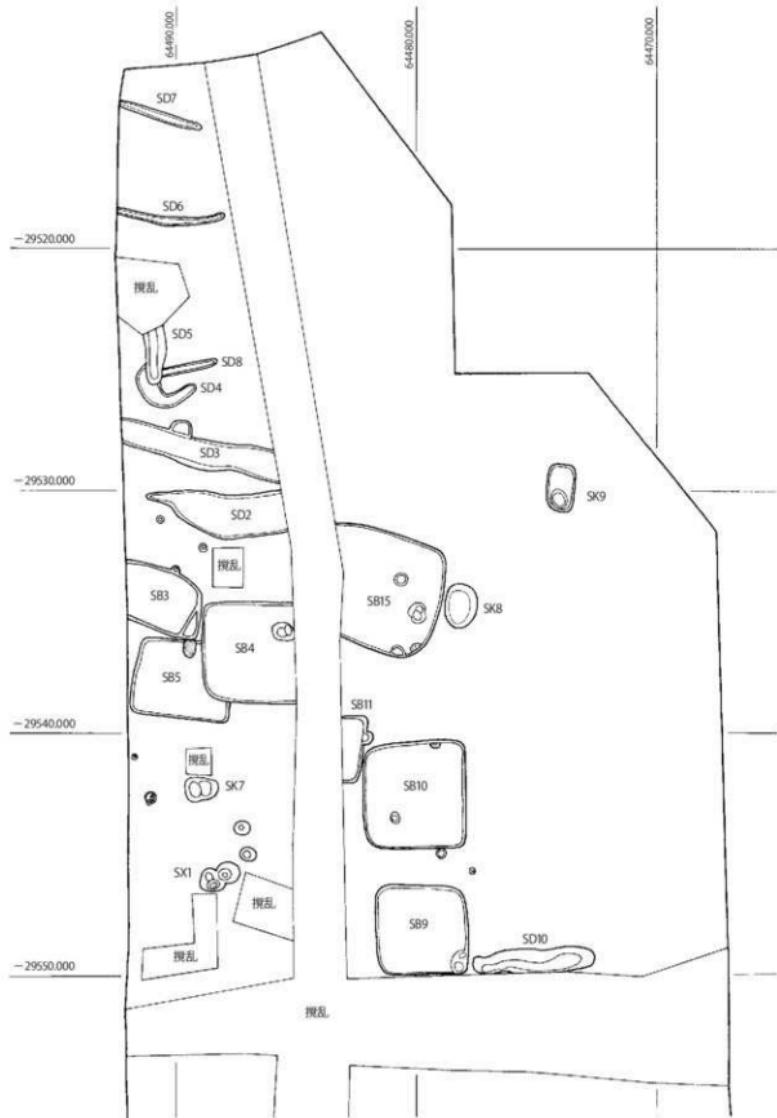


図6 北側スタンド地点全測図② (1 : 200)

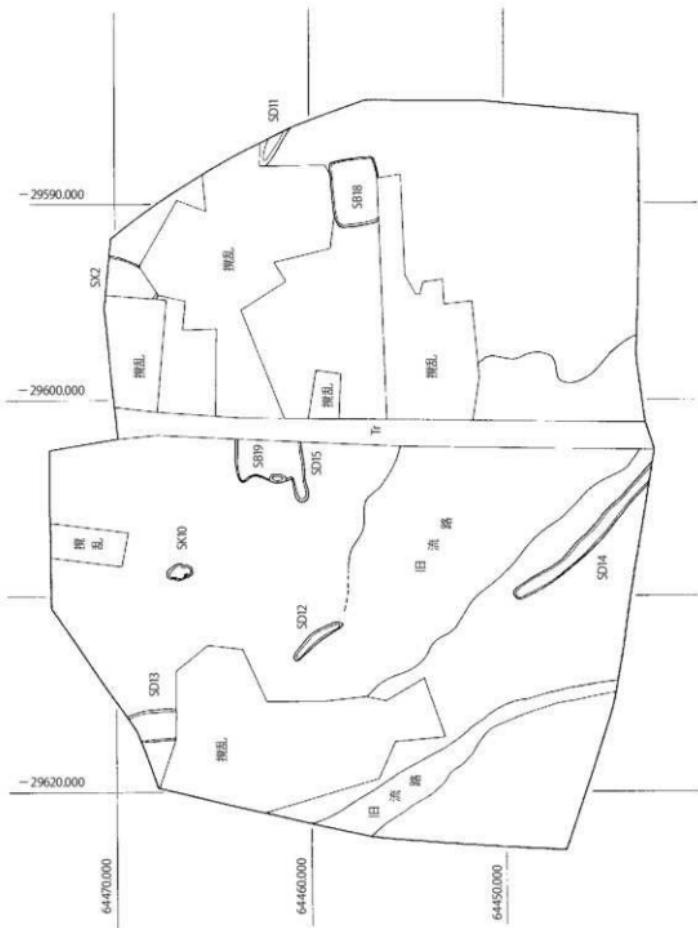


図7 メインスタンド地点全測図 (1:250)

表1 検出遺構一覧表

遺構名	時代	時期	形態	規模(m)	深さ(cm)	備考
1号住居址	平安	古代13期	長方形	4.76 × 6.10	34	カマド 2号住→1号住
2号住居址	平安	古代10期	方形	4.40 × 4.30	35~45	カマド残欠
3号住居址	平安	古代9期	不整長方形	(3.45) × 2.60	35	
4号住居址	平安	古代10期	方形	(3.90) × 4.20	40~30	5号住→4号住
5号住居址	平安		方形	3.60 × 4.20	18	
6号住居址	平安	古代10期	長方形	5.30 × 7.05	40	カマド残欠 青磁破片
7号住居址	平安	古代10期	方形	3.70 × 4.40	30~20	
8号住居址	平安		方形?	3.50 × ?	15	
9号住居址	平安	10~11C	方形	3.70 × 3.70	15~10	
10号住居址	平安	古代13期	方形	4.40 × 4.20	10	
11号住居址	—	—	—	—	—	
12号住居址	中世	中世前半	不整方形	3.80 × 3.35	15	須恵質壇跡
13号住居址		古代10期	方形	3.60 × 3.45	55~40	
14号住居址	—	—	—	—	—	
15号住居址	平安	古代13~15期	長方形	(4.15) × 4.70	51	
16号住居址			方形?		30	
17号住居址			方形?	(3.50) × ?	15	
18号住居址			方形	3.30 × 2.40	15	住居址?
19号住居址			方形	3.50 × ?	15	住居址?
1号土壤			長方形?	1.65 × 1.20	5	
2号土壤			長方形?	1.65 × 0.55	5	
3号土壤		古代11・12期	橢円形	0.90 × 0.55	11	
4号土壤			不整方形	1.00 × 0.90	5	
5号土壤			方形?	1.95 × (1.07)	7	
7号土壤			方形?	1.30 × 1.00	14	
8号土壤	平安	古代10期	橢円形	1.80 × 1.40	50	
9号土壤			長方形	2.00 × 1.20	10	
10号土壤	平安	古代9~10期	不整形	1.20 × 0.75	13	
SX1号土壤		10~11C	不整円形	1.00 × 0.90	15	
SX2号土壤			不整形	?	10	
1号井戸址			不整円形	2.60 × 2.50	60	
1号溝址				幅 0.60 ~ 0.30	16~11	
2号溝址	平安			幅 1.80	20	
3号溝址				幅 1.05 ~ 1.20	10	
4号溝址				幅 0.40 ~ 0.80	10	4号溝→5号溝
5号溝址	平安	古代11・12期		幅 0.80	43	
6号溝址				幅 0.35	5	
7号溝址				幅 0.35 長 3.40	5	
8号溝址				幅 0.40	5	8号溝→5号溝
9号溝址				幅 0.60 長 5.60	13	
10号溝址				幅 1.10 長 5.00	40	
11号溝址					40	
12号溝址				幅 0.50 長 3.00	7	
13号溝址				幅 1.60	13	
14号溝址				幅 0.75	10	
15号溝址				幅 0.70	12	

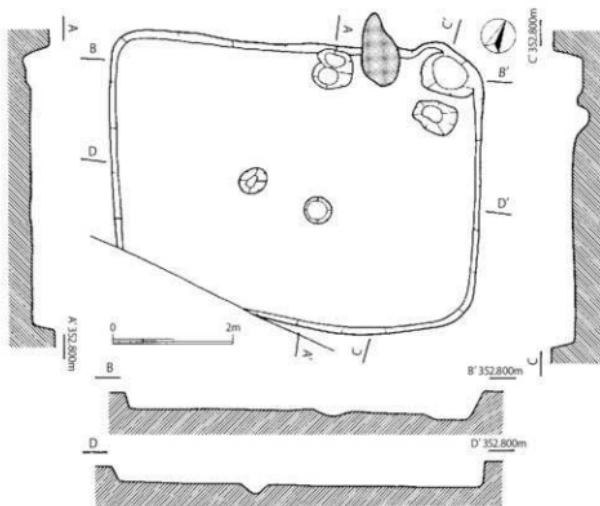


図8 1号住居址実測図 (1:80)

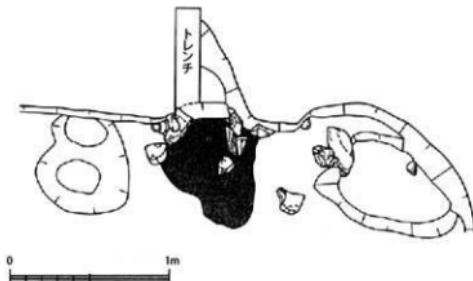


図9 1号住居址カマド実測図 (1:30)

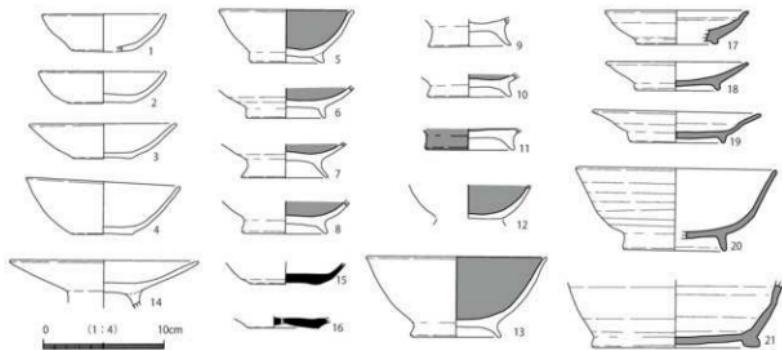


图 10 1号住居址出土土器实测图

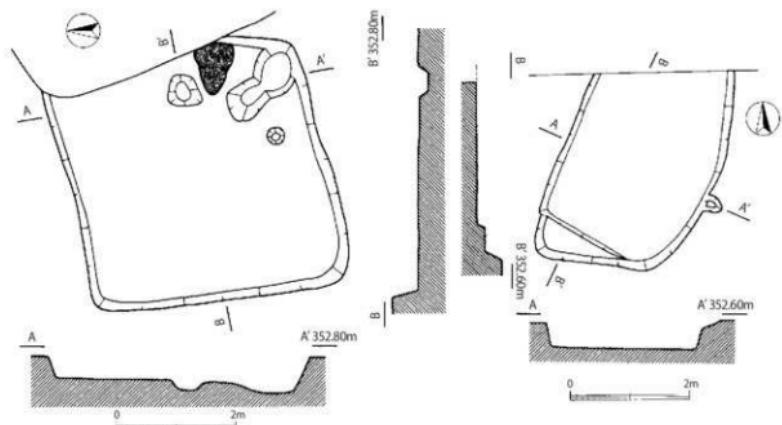


图 11 2号住居址实测图 (1:80)

图 12 3号住居址实测图 (1:80)

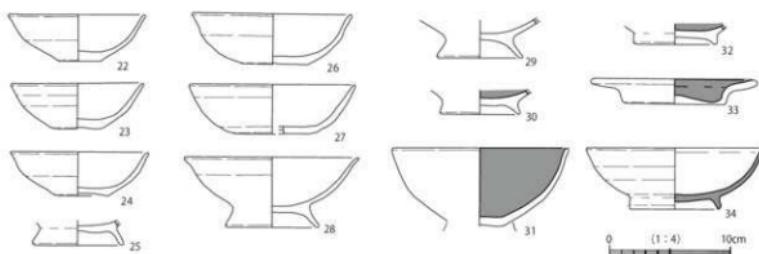


图 13 2号住居址出土土器实测图

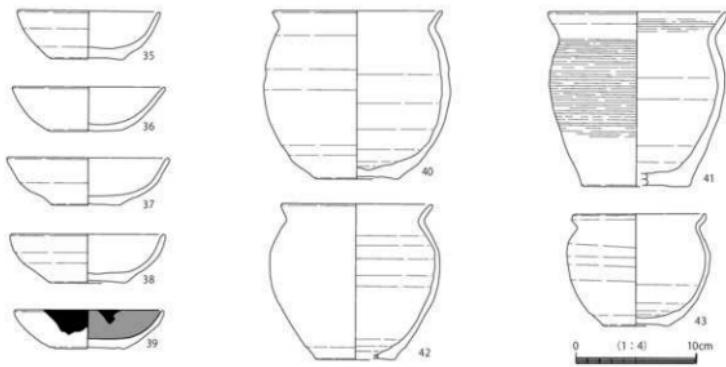


图 14 3号住居址出土土器実測図

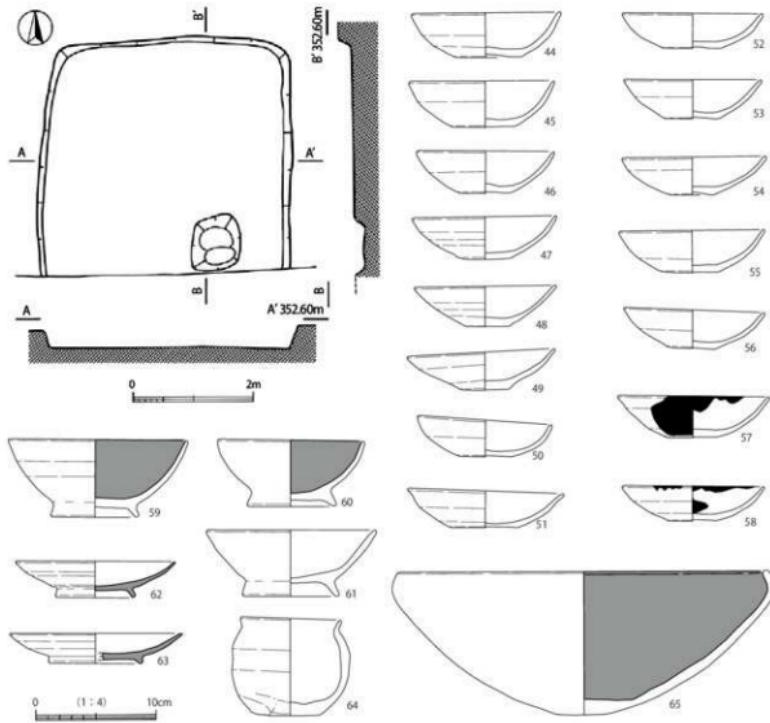


图 15 4号住居址・出土土器実測図

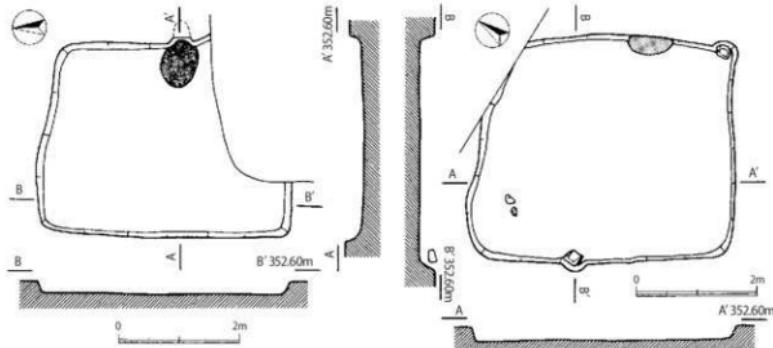


図 16 5号住居址実測図 (1:80)

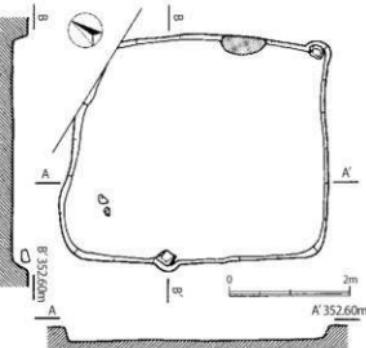


図 17 7号住居址実測図 (1:80)

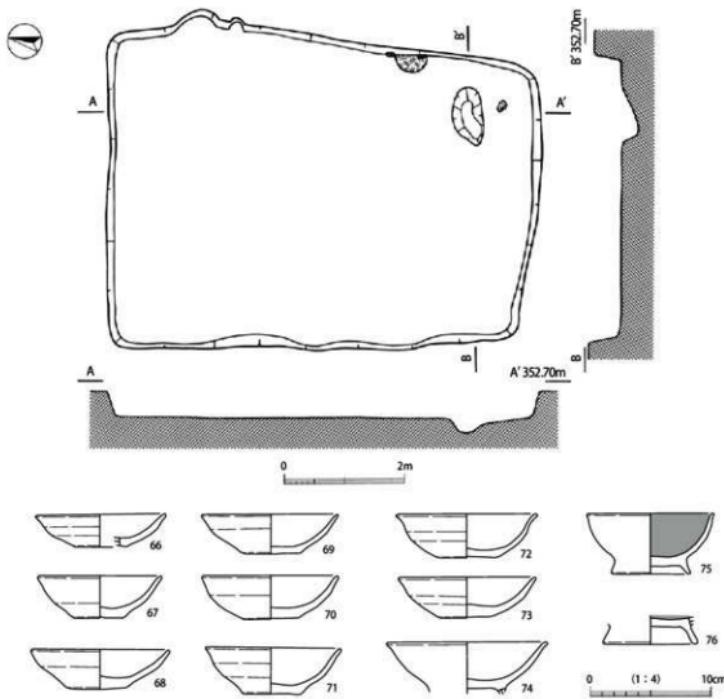


図 18 6号住居址・出土土器実測図

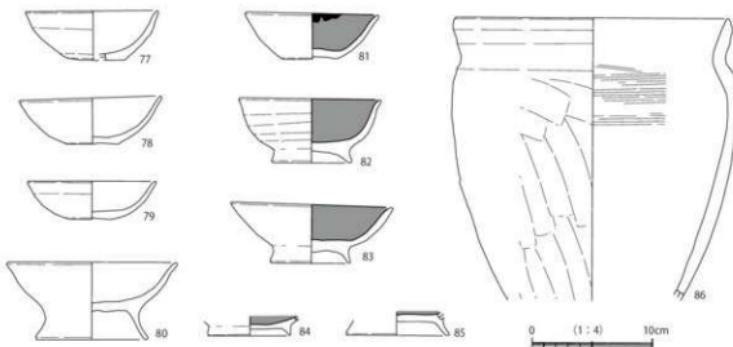


图 19 7号住居址出土土器实测图

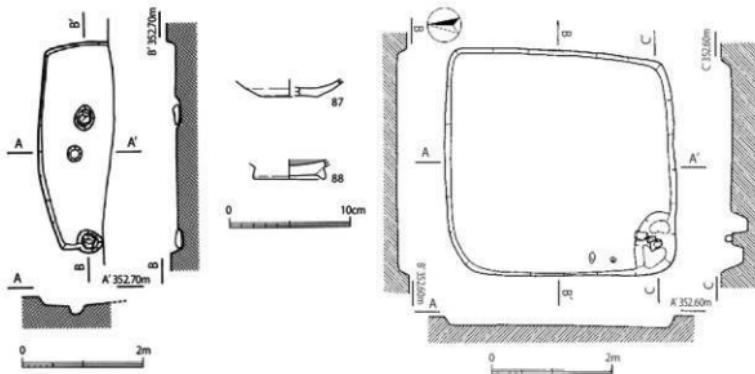


图 20 8号住居址・出土土器实测图

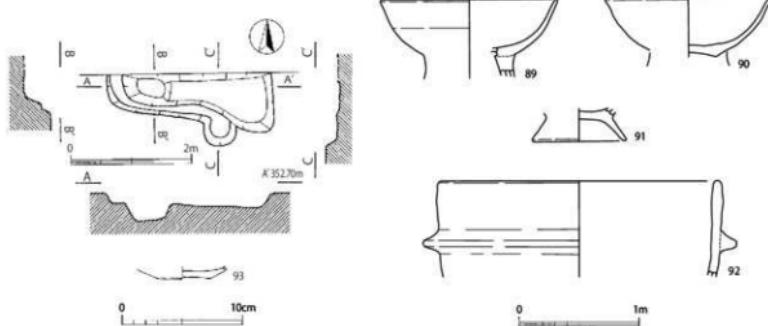


图 22 11号住居址・出土土器实测图

图 21 9号住居址・出土土器实测图

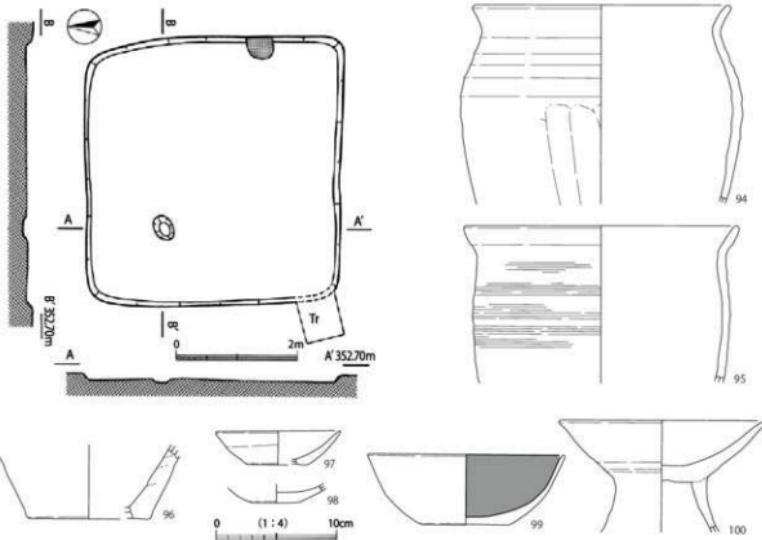


图 23 10号住居址・出土土器実測図

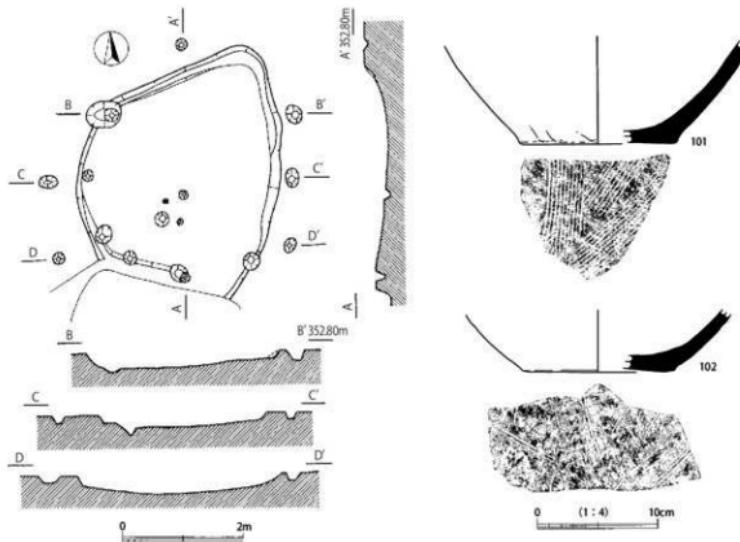


图 24 12号住居址・出土土器実測図

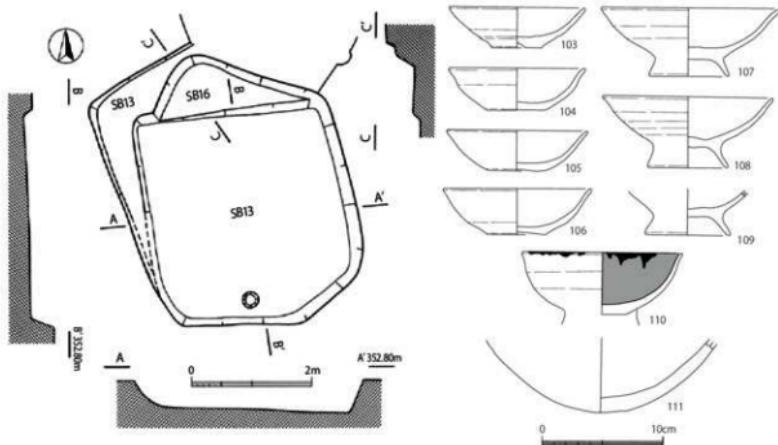


図25 13・16・17号住居址実測図・13号住居址出土土器実測図

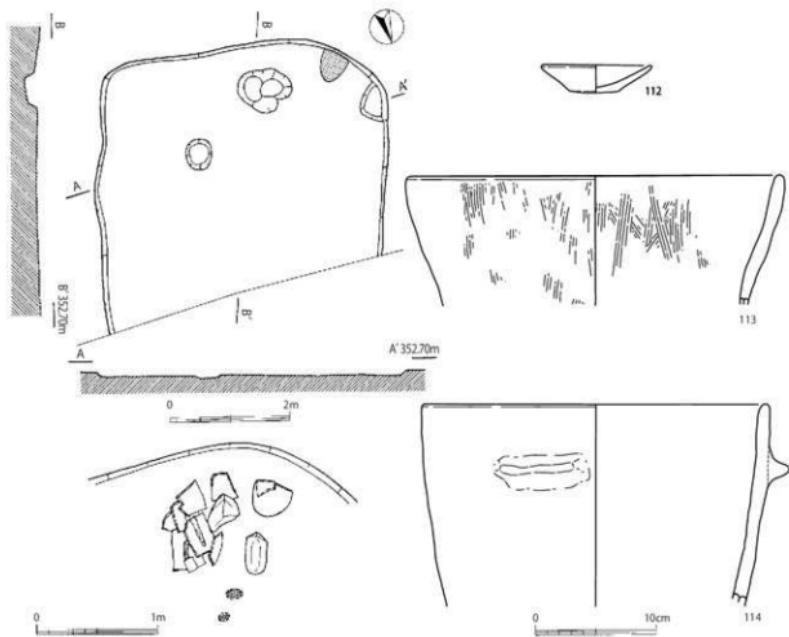


図26 15号住居址・カマド・出土土器実測図

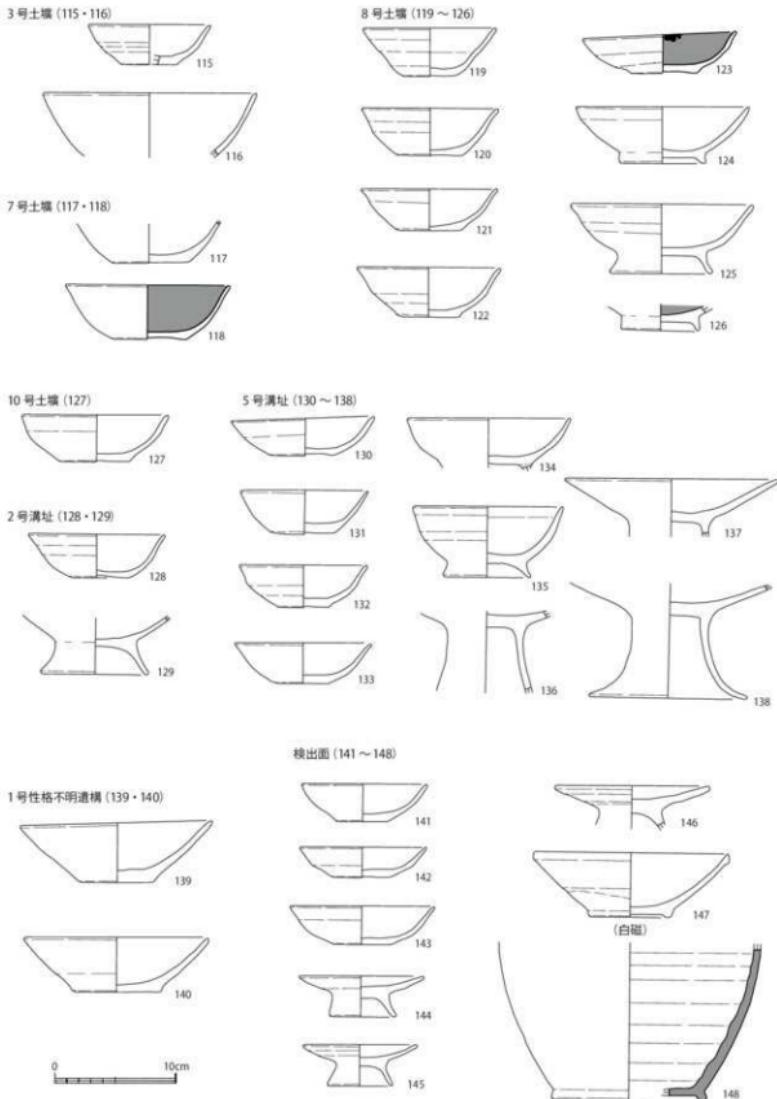


図27 その他遺構・検出面出土土器実測図

表2 出土土器観察表

No.	出土遺物名	種別	器形	出土層位	口径	底径	高さ	通体質	外観		調査・文書等		その他	
									上面	下面	内面	裏部		
1	1号住居址	土師	升	甌土下層	10.2	5.1	3.1	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
2	1号住居址	土師	升	甌土上層	10.6	5.8	2.6	1.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
3	1号住居址	土師	升	甌土下層	12.2	4.6	2.9	1.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	不明		
4	1号住居址	土師	升	カマ F	12.7	5.0	4.3	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
5	1号住居址	黑色土器 A	椀	甌土下層	11.2	6.3	4.4	2.3	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	回板本切り	回板本切り		
6	1号住居址	黑色土器 A	椀	ビック内	—	6.6	—	1.4	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	摩耗不明	摩耗不明		
7	1号住居址	黑色土器 A	椀	甌土下層	—	—	7.3	1.4	摩耗不明	ヘラミガキ→黒色處理	摩耗不明	摩耗不明		
8	1号住居址	黑色土器 A	椀	甌土下層	—	7.2	—	—	摩耗不明	ヘラミガキ→黒色處理	摩耗不明	摩耗不明		
9	1号住居址	土師	升	甌土上層	—	6.8	—	—	完	ロクロナデ	ロクロナデ	摩耗不明		
10	1号住居址	黑色土器 A	椀	甌土下層	—	7.0	—	—	完	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	回板本切り	回板本切り	
11	1号住居址	黑色土器 B	椀	カマ D周辺	—	7.4	—	—	完	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	回板本切り	回板本切り	
12	1号住居址	黑色土器 A	椀	甌土下層	—	—	—	—	完	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	回板本切り	回板本切り	
13	1号住居址	黑色土器 A	椀	カマ D周辺	14.9	7.5	6.6	1.3	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	回板本切り		
14	1号住居址	土師	高鉢	甌土上層	15.6	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		
15	1号住居址	須恵	升	甌土下層	—	5.8	—	—	23	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り		
16	1号住居址	須恵	升	甌土上層	—	5.8	—	—	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り		
17	1号住居址	綠釉	升	甌土上層	11.8	6.8	2.8	1.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		
18	1号住居址	灰釉	升	甌土上層	11.9	7.2	2.4	1.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		
19	1号住居址	灰釉	升	甌土下層	13.8	7.9	2.6	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		
20	1号住居址	灰釉	升	ビック内	16.6	8.6	6.8	1.2	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色ケズリ 1箇	ロクロナデ	ロクロナデ		
21	1号住居址	灰釉	長颈瓶	ビック内	—	13.8	—	—	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	
22	2号住居址	土師	升	甌土下層	11.3	3.7	3.0	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
23	2号住居址	土師	升	カマ D周辺	10.9	4.0	3.7	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
24	2号住居址	土師	升	甌土下層	11.4	4.5	3.6	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
25	2号住居址	土師	升	甌土下層	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
26	2号住居址	土師	升	甌土下層	13.0	5.3	4.1	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
27	2号住居址	土師	升	甌土下層	13.6	6.1	4.1	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
28	2号住居址	土師	升	カマ E	14.4	7.7	5.7	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	摩耗不明	摩耗不明		
29	2号住居址	土師	升	甌土上層	—	7.2	—	—	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り	
30	2号住居址	黑色土器 A	椀	ビック内	—	6.7	—	—	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	不明	不明		
31	2号住居址	黑色土器 A	椀	甌土下層	14.6	—	—	—	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理		
32	2号住居址	黑色土器 A	椀	甌土下層	—	6.9	—	—	完	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	
33	2号住居址	黑色土器 A	升	甌土下層	13.7	8.5	2.1	—	完	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	
34	2号住居址	天祐	升	甌土上層	14.5	7.5	5.0	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
35	3号住居址	土師	升	甌土下層	11.8	6.0	3.9	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
36	3号住居址	土師	升	カマ F	12.6	6.4	3.7	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
37	3号住居址	土師	升	甌土下層	13.4	5.8	3.9	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	回板本切り	回板本切り		
38	3号住居址	土師	升	甌土下層	12.8	6.3	4.1	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		

No.	出土遺物名	種別	経緯	出土層位	法量			保存度	調査・文書等		その他
					口径	底径	高さ		外面	内面	
39	3号住居址 黒色土器A	灰	土師	甕	12.3	5.1	3.2	1/3	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	灯明皿
40	3号住居址 土師	甕	土師	甕	14.8	7.2	12.3	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
41	3号住居址 土師	甕	土師	甕	14.8	9.0	10.6	1/2	ロクロナデ→カラキヌ	ロクロナデ	静止、切り
42	3号住居址 土師	甕	土師	甕	12.5	6.6	10.7	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
43	3号住居址 土師	甕	土師	甕	11.0	5.5	9.2	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
44	4号住居址 土師	灰	土師	甕	12.3	5.7	3.7	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
45	4号住居址 土師	灰	土師	甕	12.0	5.5	3.8	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	焼付甕
46	4号住居址 土師	土師	土師	甕上・下	11.4	4.9	3.5	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
47	4号住居址 土師	土師	土師	甕	11.9	4.4	3.5	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
48	4号住居址 土師	土師	土師	甕	11.8	3.7	3.0	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
49	4号住居址 土師	土師	土師	甕	12.2	4.3	3.1	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
50	4号住居址 土師	土師	土師	甕	11.1	4.4	3.0	完	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
51	4号住居址 土師	土師	土師	甕	12.9	5.9	3.0	完	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
52	4号住居址 土師	土師	土師	甕上・下	11.6	4.8	2.9	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	摩耗・明
53	4号住居址 土師	土師	土師	甕	11.4	4.7	3.2	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
54	4号住居址 土師	土師	土師	甕	11.9	3.8	3.1	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
55	4号住居址 土師	土師	土師	甕	12.0	4.9	3.5	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
56	4号住居址 土師	土師	土師	甕上・下	11.7	4.2	3.2	完	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
57	4号住居址 土師	土師	土師	甕	12.5	4.8	3.4	3/4	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
58	4号住居址 土師	土師	土師	甕	11.4	4.1	2.9	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
59	4号住居址 黒色土器A	灰	土師	甕	14.8	7.3	6.4	2/3	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	圓底、切り
60	4号住居址 土師	灰	土師	甕	12.1	7.3	5.5	完	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
61	4号住居址 土師	灰	土師	甕	14.0	8.0	5.5	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→ナナデ
62	4号住居址 土師	灰	土師	甕上・下	13.2	6.6	3.0	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
63	4号住居址 土師	灰	土師	甕	14.2	7.8	2.5	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
64	4号住居址 土師	灰	土師	甕	8.3	5.6	8.0	2/3	ロクロナデ→底部削除ケズリ	ロクロナデ	削除ケズリ
65	4号住居址 黒色土器A	灰	土師	甕	30.4	4.3	11.8	1/2	ケズリ→ナナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ナナデ
66	6号住居址 土師	灰	土師	甕	10.7	4.3	2.6	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
67	6号住居址 土師	灰	土師	甕上・下	10.2	4.3	3.5	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
68	6号住居址 土師	灰	土師	甕	11.4	5.0	3.3	3/4	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
69	6号住居址 土師	灰	土師	甕上・内	11.2	5.1	3.3	3/4	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
70	6号住居址 土師	灰	土師	甕上・下	11.2	4.8	3.6	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
71	6号住居址 土師	灰	土師	甕	11.2	4.9	3.8	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
72	6号住居址 土師	灰	土師	トレンチ	11.6	4.7	3.6	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
73	6号住居址 土師	灰	土師	甕	11.3	4.5	3.3	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
74	6号住居址 土師	灰	土師	甕	13.2	-	4.2	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り
75	6号住居址 黒色土器A	灰	土師	甕上・下	10.4	6.5	4.9	1/2	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ナナデ
76	6号住居址 黒色土器A	灰	土師	甕上・下	-	7.8	-	2/3	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ナナデ
77	7号住居址 土師	灰	土師	カマフラ	10.9	5.1	4.0	3/4	ロクロナデ	ロクロナデ	圓底、切り

No.	出土遺物名	種別	器種	出土層位	法縁			通体度	外観		調査・文書等		その他
					口径	底径	高さ		底面	側面	裏面	裏面	
78	7号住居址	土師	环	底直	11.7	4.2	3.8	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転式切り	回転式切り	
79	7号住居址	土師	环	カマ F	10.6	4.4	3.1	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転式	回転式	
80	7号住居址	土師	盤 B	底上・上部	14.0	9.2	6.3	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
81	7号住居址	黑色土器 A	环	底直	11.0	4.7	3.7	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
82	7号住居址	黑色土器 A	碗	カマ F	11.7	6.6	5.2	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
83	7号住居址	黑色土器 A	椀	カマ F	13.3	6.6	4.8	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
84	7号住居址	黑色土器 A	椀	底上・上部	-	6.8	-	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
85	7号住居址	黑色土器 A	椀	底上・上部	-	8.5	-	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
86	7号住居址	土師	甕	底直	22.4	-	-	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
87	8号住居址	土師	环	底直	-	5.0	-	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
88	8号住居址	黑色土器 A	椀	底直	-	6.0	-	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
89	9号住居址	土師	盤 B	底直	14.6	-	-	1/3	摩耗不明	ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
90	9号住居址	土师	碗	底直	13.8	-	-	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
91	9号住居址	土师	盤 B	底直	-	7.8	-	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
92	9号住居址	土师	羽釜	底直	14.6	-	-	1/4	ナデ	ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
93	11号住居址	土師	环	底直	-	4.6	-	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
94	10号住居址	土师	甕	カマド周辺	22.6	-	-	1/3	ロクロナデ	カキメ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
95	10号住居址	土师	甕	カマド周辺	21.2	-	-	1/4	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
96	10号住居址	土师	甕	カマ F	-	10.0	-	1/3	ナデ	ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
97	10号住居址	土师	环	底直	10.3	5.3	2.8	4/5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
98	10号住居址	土师	环	底直	-	4.2	-	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
99	10号住居址	黑色土器 A	椀	カマド周辺	16.2	7.8	5.8	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
100	10号住居址	土师	高甕	底直	17.0	-	-	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
101	12号住居址	須惠質	盤林	底直	-	13.0	-	1/6	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
102	12号住居址	須惠質	盤林	底直	-	12.6	-	1/2	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
103	13号住居址	土师	环	底上・上部	11.2	4.2	3.4	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
104	13号住居址	土师	环	底直	11.2	5.0	3.5	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
105	13号住居址	土师	环	カマド周辺	11.6	4.8	3.3	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
106	13号住居址	土师	环	底上・上部	12.2	5.2	3.8	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
107	13号住居址	土师	椀	底直	14.6	6.6	5.6	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
108	13号住居址	土师	椀	底直	14.0	6.6	5.8	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
109	13号住居址	黑色土器 A	椀	カマド周辺	-	7.0	-	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
110	13号住居址	黑色土器 A	椀	カマ F	13.2	-	-	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
111	13号住居址	土师	甕?	底直	-	—	-	完	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	摩耗不明	摩耗不明	摩耗不明
112	15号住居址	土师	环	底直	9.1	4.2	2.3	完	摩耗不明	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
113	15号住居址	土师	カマ F	底直	31.0	-	-	1/3	ナデ	ナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理
114	15号住居址	土师	羽釜	カマ F	28.6	-	-	2/5	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
115	SK3号土器	土师	环	底直	10.0	4.5	3.3	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
116	SK3号土器	土师	碗	底直	17.5	-	-	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ

No.	出土遺物名	種別	基盤	出土層位	法縁			遺存度	外観		調査・文書等		その他	
					口径	底径	高さ		完	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理		
117	SK7号土壇	土財	环	覆土	—	6.1	4.4	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	回板未切り	
118	SK7号土壇	黑色土器A	环	覆土	13.5	6.1	4	—	4/4	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
119	SK8号土壇	土財	环	覆土	11.0	4.6	4.0	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
120	SK8号土壇	土財	环	覆土	11.2	5.6	3.9	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
121	SK8号土壇	土財	环	覆土	11.2	5.5	3.5	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
122	SK8号土壇	土財	环	覆土	11.8	5.3	4.1	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
123	SK8号土壇	黑色土器A	环	覆土	12.7	5.5	3.2	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
124	SK8号土壇	土財	輪	覆土	14.3	7.1	4.6	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
125	SK8号土壇	土財	輪	覆土	15.0	8.5	5.7	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
126	SK8号土壇	黑色土器A	輪	覆土	—	—	—	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラミガキ→黒色處理	ナデ	
127	SK10号土壇	土財	环	覆土	12.0	5.8	3.8	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
128	2号陶社	土財	环	覆土	11.2	4.7	3.6	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
129	2号陶社	土財	盤B	覆土	—	8.9	—	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
130	5号陶社	土財	环	覆土	11.7	5.4	3.1	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	
131	5号陶社	土財	环	覆土	10.4	5.6	3.5	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
132	5号陶社	土財	环	覆土	10.5	4.6	3.5	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
133	5号陶社	土財	环	覆土	11.2	4.9	3.4	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
134	5号陶社	土財	輪	覆土	13.4	—	—	—	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り
135	5号陶社	土財	輪	覆土	12.4	7.2	5.8	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	回板未切り	
136	5号陶社	土財	高輪	覆土	—	—	—	—	1/3	摩耗不明	摩耗不明	摩耗不明	摩耗不明	摩耗不明
137	5号陶社	土財	高輪	覆土	17.6	—	—	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
138	5号陶社	土財	高輪	覆土	—	13.0	—	2/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
139	SK1号土壇	土財	环	覆土	15.8	6.0	4.9	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	摩耗不明	
140	SK1号土壇	土財	环	覆土	15.1	7.2	4.5	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	摩耗不明	
141	検出面	土財	环	—	10.3	4.5	3.1	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
142	検出面	土財	环	—	10.5	4.7	2.5	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
143	検出面	土財	盤B	—	11.9	4.9	3.1	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
144	検出面	土財	盤B	—	10.2	5.5	3.4	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
145	検出面	土財	盤B	—	9.4	5.4	3.4	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
146	検出面	土財	盤B	—	12.8	—	—	3/4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回板未切り	
147	検出面	白磁	輪	—	16.0	6.8	5.3	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	11cm半~12cm前半	
148	検出面	灰釉	蓋	—	12.8	—	—	1/6	ロクロナデ	ケズ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	

第4章 南宮遺跡の消長

鳥羽 英継

これまでの数次にわたる南宮遺跡の調査と個々の研究成果（註1）を総合し、南宮遺跡の消長をまとめる。時期区分と実年代は屋代編年したがい表1に示す。

1 南宮遺跡の成立・発展

(1) 9世紀初頭～9世紀前半（古代5期～7期前半）

南宮遺跡の位置する川中島扇状地は、弥生時代以降開発が進んだ周辺地域と比較すると開発は遅れ（図1）、集落の形成は6世紀後半からである（図2）。開発が遅れた理由は、犀川の乱流（図3・図2）を中心に、扇端部では千曲川の氾濫も含め他地域より安定的な耕地の確保に問題があったためと考えられる。最初の集落は田中沖遺跡、上九反遺跡等（図2）の限られた範囲で、扇状地一帯に集落が広がるのは9世紀に入ってからである（図4）。9世紀の集落増大はこの地域のみの現象ではなく、東国も含めて信濃全体に広く見られ、大開発の時代としてとらえられるが、南宮遺跡の成立もこの大開発の流れの中の一つとして位置付く。成立は9世紀初頭で、16地区にK S B 95が一軒のみ確認できる。（付図1-①）

9世紀前半は15・16地区に引き続き集落が見られ、更に2・5地区を中心新たに集落が成立する（付図1-①）。ただ、総数は竪穴建物が19軒程で、大きな建物もなくごく一般的な集落である。この時期のL S B 10からは、在地に見られない須恵器瓶が出土している（図5）。両肩の突起が特徴的で類例は不明だが、遺跡の開始にあたって、信濃以外の人々も開発に関わった可能性があろう。活発な人の動きが推定される。



川中島扇状地に遺跡は未成立

図1 弥生時代～古墳時代中期の遺跡（善光寺平南部）



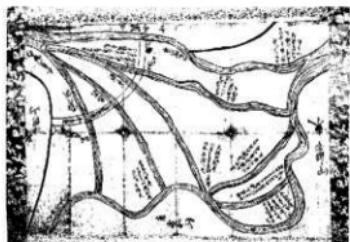
1 田中沖遺跡 2 上九反遺跡
★は古墳群 川中島扇状地以外の集落遺跡は剖愛
四通、中瀬等は「犀川乱流の図」からの推定線

川中島扇状地に遺跡が成立

図2 古墳時代後期の遺跡（善光寺平南部）

表1 時期の呼称と実年代

土器編年	時期	古代9期	10世紀前葉
古代5期	8世紀末葉～9世紀初頭	古代10期	10世紀中葉
古6期	9世紀初葉	古代11・12期	10世紀後葉
古代7期前半	9世紀前半	古代13期	10世紀末葉～11世紀初葉
古代7期後半	9世紀後葉3四半期	古代14期	11世紀前葉
古代8期	9世紀後葉4四半期	古代15期	11世紀後葉



中世から近世初頭に犀川の乱流を描いたもの
5つの瀧が見える

図3 犀川乱流の図



図4 9～10世紀成立の遺跡（普光寺平南部）

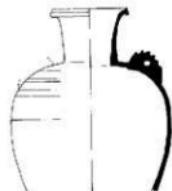


図5 外来系土器 (LSB10) S=1:8

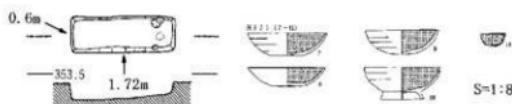


図6 墓と出土遺物 (HSJ1)

(2) 9世紀第3四半期（古代7期後半）

建物数が急増し48軒の竪穴建物が確認できる（付図1-②）。8地区以西（1～9地区）を西集落、12地区以東（10～20地区）を東集落と呼ぶと、遺跡の中心は西集落で、広範囲に竪穴建物が見られ東西300m弱、南北150m程の大きな集落域が形成される。周辺でこの時期に成立する墓地遺跡（図4-6）では、集落南側に遺跡成立期の水田が広く確認できる。南宮遺跡の建物急増の背景も周辺の水田開発に関わるものであろう。

この時期4地区には墓（HSJ1）が造られる（付図1-②）（図6）。 1.72×0.6 mと規模は小さいものの人骨が出土し、鉢形のミニチュア土器も含めて副葬品も出土している。南宮遺跡で時期が分かれる唯一の墓である。（註3）

(3) 9世紀第4四半期（古代8期）

70軒の竪穴建物が確認でき、増加傾向が続く（付図2-③）。東集落は2軒のみで、増加の中心は西集落である。この時期の大きな特徴は、5地区北東部に有力者の方形の居宅が形成されたことである（図7-1）。居宅は東を自然流路、他の三方を空白帶（道）で画された約75×75m、5625m²程の規模をもつ。

居宅内部には遺跡内で最大の竪穴建物が存在し（C S B 24 56.24m²）、竪穴建物は大きなものと小さなものが混在し、居宅西側には、ほぼ方形状の約30×17.5mの空閑地（神社城）が形成される。この空間には後に竪穴建物が多く造られたために、成立期の神社の内部状況は不明である（図7-1）。居宅内の大きな竪穴建物はこの空閑地の南側に位置し、居宅は10世紀前葉、中葉へと継続・発展していく。また、35mを超えるような大

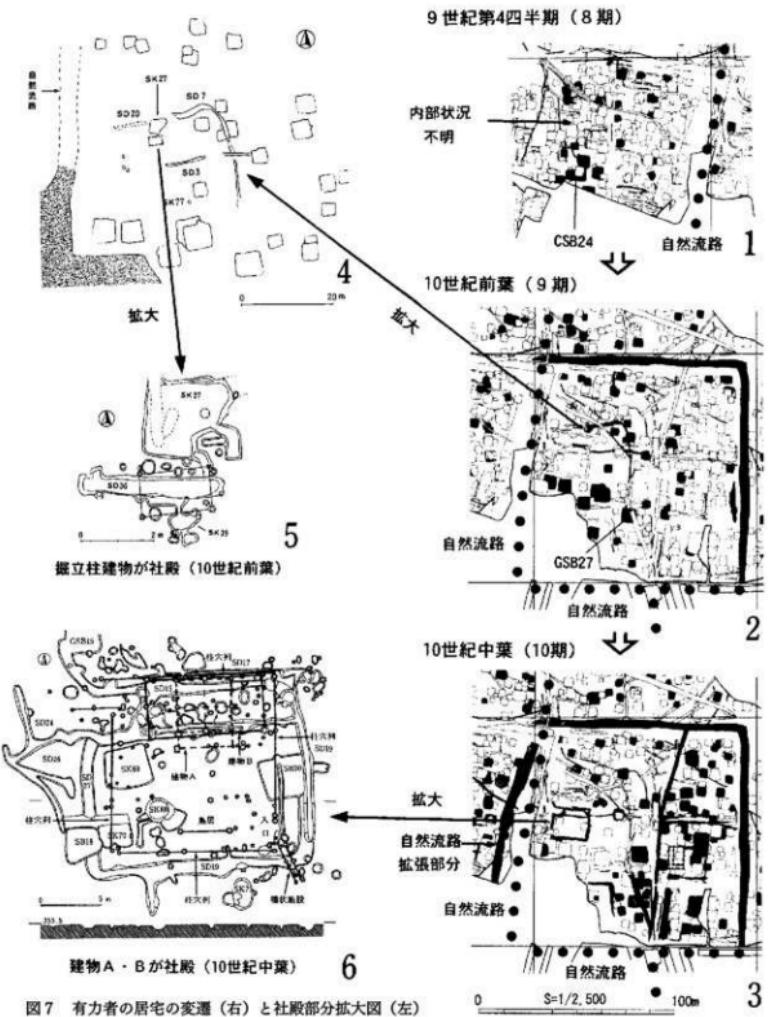


図7 有力者の居宅の変遷（右）と社殿部分拡大図（左）

きな建物は居住以外ではなく、西集落には25m以下の小さな建物が非常に多いことから、有力者は西集落の多くの農民を勢力下において周辺の開発を行ったと考えられる。(註4)

(4) 10世紀前葉(古代9期)

堅穴建物は152軒となり、倍以上に増加する(付図2-④)。東集落はやや成長し、15地区を中心に15軒程確認できるが、中心は西集落である。この時期の特徴は、前時期の有力者の居宅が居宅内の構成を引き継ぎながら5地区から8地区に規模を大きくして移転したことである(図7-2)。居宅の北と東側には大きな区画溝が掘削された。幅3.5~5m、深さは1m、外法は約110mを測る。西側は自然流路、南側は未調査区もあるが、自然流路と人工の大溝で区画されていたと推定され、8地区全体が区画施設に囲まれた有力者の居宅を形成する。

居宅の特徴は、区画施設を持つ点、内部に遺跡内でこの時期最大の堅穴建物が存在する点(GSB27 58.5m²)、堅穴建物は大きなものと小さなものが混在する点、更に北西側にはほぼ方形の約33×45mの空閑地(神社域)が存在し、大きな堅穴建物はこの空閑地の南側に位置している点等、全て前時期の居宅の特徴を引き継ぐものとなっている。神社域については図7-4・5に内部の拡大図を示した。図7-5には社殿に当たる部分を図示したが、SD36をまたぐ形で1.1×1.9mの小さな掘立柱建物(社殿)が造られる。そして、この社殿を囲むようには図7-4に見えるSD7、SD3、(SD20は遺物が少ないため想定)という溝が存在している。社殿は空閑地のほぼ中央にある点、社殿が溝をまたぐように建てられている点、更に社殿を溝が区画する点等、次の時期に整備される神社との共通性が高い。この時期最大の建物面積をもつGSB27は前時期とほぼ同じ大きさである。居宅以外に集落の核となるような大きな建物はほとんどなく、居宅周辺には25m²以下の小さな堅穴建物が多く集まっている。居宅に居住する有力者はこれらの人々を勢力下において周辺の開発を継続するための中心的役割を担っていたと考えられる。

更に、この時期には遺跡内に5本の空白帯が明確に確認できる(付図2-④ ライン1~5)。ライン間の距離は105m前後~115m前後を測り、約一町を意識した区画が推定できる。これは、周辺に条里が存在し、その区画によって堅穴建物の配置が規制されたものと考えられる。このことから、南宮遺跡周辺では条里の造成を伴う開発が行われていた可能性を指摘でき、堅穴建物の急増は、9世紀末葉に廃絶した多くの周辺遺跡等の人々が開発のために集められたことを物語っている。現在、川中島扇状地では表面条里はほとんど確認できないが、古代においては周辺の星代遺跡群や石川条里遺跡等と同様の条里の開発が行われていた可能性がある。(註5)

(5) 10世紀中葉(古代10期)

建物数は224軒となり最盛期を迎える。東集落では前時期まで空閑地だった12・16地区にも集落が成立し、西集落と東集落は一つの大きな村の様に見える集村形態を持った景観となる(付図3-⑤)。ただし、祭祀の器(土師器を中心とした高盤・耳皿・鼎形土器・盤A)や土器の大量消費遺構の分析から、西集落と東集落には明確な系譜の違いが見られ、別の集落としてとらえる必要があることが分かっている。(註6)

西集落の有力者の居宅(図7-3)は、前時期の8地区に引き続き存続するが、大きく改修の手が加えられた。西側を区画した自然流路部分は更に西側に大きく拡張され、自然流路と共に幅の広い区画施設となった。居宅内部は図8の様に改修され、溝(道)と



図8 有力者の居宅内部(10期・10世紀中葉)

神社域の境によって6つの空間に分けられ、有力者の住居は居宅内東側の中央の区画に、100m²を超える廂付きの5×3間の掘立柱建物（FST1）が造られた（図8・9）。竪穴建物主体の南宮遺跡にあって、この大きな掘立柱建物は有力者の力の大きさを如実に示すものであった。西側の空闊地に位置した神社域にも、そのほぼ中央に図7-6のように明確な社殿（建物A・B）が溝をまいた形で造られ、溝や柱穴列による回廊施設も造られ、図8のように東集落方面からの参道や手水舎も整備され、より広い地域を対象とした宗教施設となつた可能性が高い。また、他の空間も有力者に従属する人々が住んだ空間（居宅内の北西部）や手工業生産や土器の大口消費を行う区间（居宅内の残りの空間）等に機能的に分けられた。（註7）

この有力者の居宅からは、綠釉陶器や銅鏡の出土が飛び抜けて多く、更に土器の大量消費構造も多い。また、鍛冶炉の出土も多く、鉄製品生産の中心となると共に、銅製品の鋳造を行っていた遺構も確認でき、多量の貯蔵具や大型の貯蔵具を保有する竪穴建物もあり、有力者の飛び抜けた力の大きさを示している。西集落は8地区の有力者という大きな勢力のもとに、これと血縁的に近い5地区的有力者が補完的に関わって、周辺の小さな竪穴建物に暮らす人々を従属させて生産活動を展開するという古代的な集落形態を、10世紀になつても持ち続けた集落であった。（註8）

また、遺跡が急拡大する10世紀前葉～中葉にかけて鐵鎌の出土が急増し（図10）、有力者には武力の蓄積があったことも指摘できる。富を守るために、国衙からの検田使を排除したり、対抗する他の勢力に対して優位な関係を保つために武力が必要とされたのであろう。このような有力者の性格として、富豪層、私領主、田堵等の姿が考えられる。（註9）

東集落も12・16地区に新たに集落ができるて竪穴建物数が増加し、35m²以上の大きな建物も複数見られるようになった。周辺の開発が軌道にのり、新たな有力者として成長してきたことを物語っている。ただし、西集落の8地区に居住する有力者の力が、構造・遺物面から見て飛び抜けて大きく、東集落の有力者は自らのまわりの小さな竪穴建物に暮らす人々を従属させて開発を行いつつも、西集落の有力者の勢力下におかれて開発行為を行うという二重の構造を持っていたと考えられる。（註10）

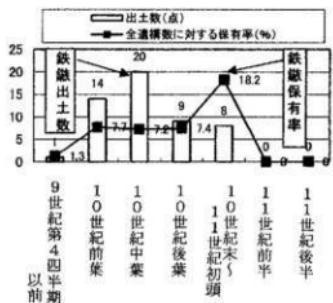


図10 鐵鎌出土数・全遺構に対する保有率



図11 埋没した区画施設の上にできた竪穴建物

2 南宮遺跡の衰退・消滅

(1) 10世紀後葉(古代11・12期)

建物数は92軒と半減以下となり、南宮遺跡の衰退傾向が鮮明となる時期である。衰退が顕著なのは西集落である(付図3-⑥)。衰退の始まりは、前時期の終わりに居宅を区画していた大溝や拡張された自然流路が埋まり、その上に図11に示したDSB52、DSB94、HSB37という竪穴建物が造られたことである。そしてこの時期、前時期まで継続してきた有力者の居宅の区画施設は完全に埋り、居宅そのものが消滅してしまう。集村形態は引き継ぐものの、飛び抜けた大きさの建物は消滅し、35m以上の大規模な建物は減少し、建物数も激減してしまう。有力者の居宅の消滅に伴って、集落の大きな核がなくなり、これまで一つの大きなまとまりとしてとらえられていた集落は、8地区で一ヵ所、5地区で二ヵ所等のいくつかの建物群として分散してとらえられるようになった。建物の数や位置関係から見て、8地区東側の建物群が有力者の居宅からの流れをくむものである可能性が高い。

これに対して東集落では、建物数の減少は見られるものの、35m以上の大規模な建物は引き続き存在し、それを中心にしていくつかの建物群としてまとまるあたり方は前時期と同じで、継続性が確認でき衰退傾向は顕著には見られない。

西集落の衰退に関わっては、次の二つの遺物に注目したい。一つは西集落中心に見られていた墨書き土器で、この時期の減少傾向が顕著である(図12)。墨書き土器は9世紀～10世紀中葉に多く、古代集落をまとめるための祭祀に関わる遺物の側面も持つが、その極端な減少は、集落をまとめ維持するための秩序が変化してきたことを示している。

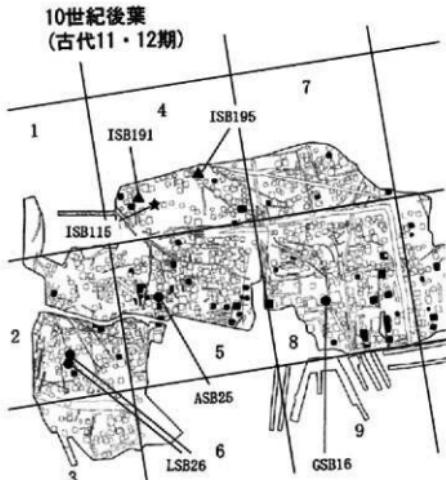


図13 八稜鏡・鉄鐸・火熨出土遺構(11・12期 10世紀後葉)

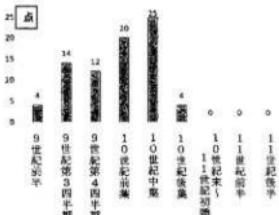
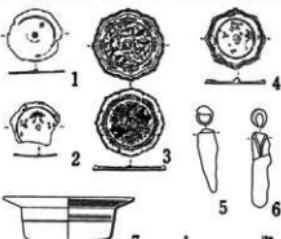


図12 墨書き土器出土数の推移(点)

No	遺物名	遺構	時期
1		ASB25	11・12期
2	●	LSB26	
3	八稜鏡		
4		GSB16	11・12期～13期
5	▲ 鉄鐸	ISB195	10期～11・12期
6		ISB191	11・12期～13期
7★	火熨	ISB115	11・12期



●: 八稜鏡 ▲: 鉄鐸 ★: 火熨

もう一つは、八稜鏡、鉄鐸、火熨といった新たな祭祀具の出土傾向である（図13）。西集落からのみ出土し、分散した建物群毎に出土する。前時期まで、西集落をまとめた8地区の有力者の居宅が消滅したことにより、集落をまとめる新たな秩序づくりが必要とされたときに、分散した建物群の個々が、それぞれ独自に新たな秩序を形成するための手段としてこれらの祭祀遺物を使用した可能性が高い。

この時期の特徴をまとめると、東集落に大きな衰退ではなく、西集落に大きな衰退傾向が見られることである。西集落では8地区の有力者という大きな核は失ったものの、分散した個々の建物群は新たな祭具を取り入れながら新たな秩序を形成し、独自に集落をまとめようとしていたと考えられる。8地区の有力者は大きく衰退したものの、それ以外の勢力は西集落、東集落共に多くが残り、開発は継続していたと考えることができよう。建物数の激減を見れば、前時期まで進められた条里の造成を伴う大規模開発は一段落あるいは中断したと考えるのが妥当であろう。

8地区の有力者が衰退した要因は、以下の二つのことが考えられる。一つ目は自然環境の変化がもたらした要因である。居宅の区画施設であった人工の大溝の埋没と同時に、居宅西側を区画していた拡張された自然流路も埋没している。自然流路の埋没は自然災害による河道の移動があったことを示し、周辺の水田を潤していた用水路が機能不全におちり、水田の荒廃が起った可能性があろう。

二つ目は、一つ目の要因によって起きた大規模な水田の荒廃により、貴族等の大資本が再開発に見切りをつけ撤退した可能性である。大資本が撤退し、有力者が寄進した私領も荒廃し、耕作実態がなくなれば国衙に没収されてしまう。有力者の財力は必然的に減少し、それまで豊富な動産・財力でつなぎとめていた周辺の農民たちりぢりに移動してしまったことが、堅穴建物の減少に良く現れていよう。

（2）10世紀末葉～11世紀初頭（古代13期）

建物数は37軒となり減少傾向が続き、集落景観が大きく変わる（付図4-⑦）。前時期までは複数の堅穴建物が集まって居住空間を構成し、跡遺全体が一つの塊のように見える集村形態をとっていたが、この時期は、一軒から数件の建物が単位となって居住域を構成し、建物群は一定の距離をおいて散在する散村形態をとるようになる。図14に示したように建物面積は、小さなものの数が減り大きなものが増え、35m²以上の大きな建物は5つの地区に分散し6軒見られるようになる（付図4-⑦に記載の道構）。鉄製品（紡錘車・鎌・刀子・苧引金）や鉄鐸の保有率も上がる（図15・10）。10世紀中葉まで続いた強固な集落のまとまりが10世紀後葉を過渡期として崩れ始め、この時期には経営の基本単位となる各建物群が力を増し、自立性を高めたことにより、それぞれ

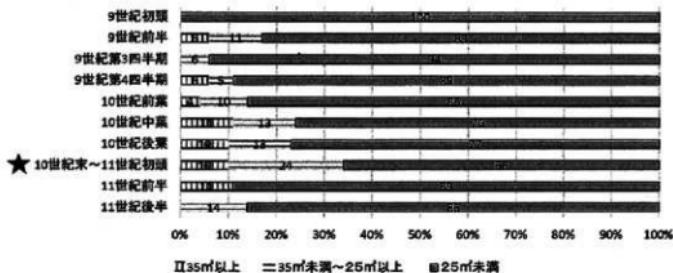


図14 建物面積の変化 報告書1分冊「住居跡観察表」と2分冊「道構の時期と根拠一覧」から作成

が散在する形態をとるようになったと考えられる。

10世紀後葉の全体図(付図3-⑥)とこの時期の全体図(付図4-⑦)を比較すると、10世紀後葉には8地区の有力者からの流れをくむ建物群が8地区東側に形成されていたが、この時期にはそれはほとんど消滅してしまっている。これとあわせて、5地区の有力者からの流れを組むと考えられる5地区東側の集落も消滅してしまう。5地区は8地区的有力者と血縁的に近いと考えられる有力者が居住しており、この時期に8地区も含めてそれに関わる有力者の系譜は完全に消滅してしまったと言える。

それとは対照的に、それ以外の建物群は10世紀後葉の分布域とほぼ重なる位置に、数は少なくなるものの自立性を高めて継続し散在している。散村形態への集落景観の変化の背景には、8地区的有力者という南宮遺跡繁栄の原動力となった大きな勢力の衰退により、残された各建物群が必然的に自立しなければ生きていけなくなつたということとも考えられよう。この時期は大きな力を持つ有力者の衰退を契機に、新しく複数の有力者が成長してきた時期としてとらえることができよう。

続く11世紀前半の全体図(付図4-⑧)と比較すると、一部を除きこの時期の建物群の多くは次の時期には継続していない。この継続性の弱さは、この時期の建物群に住む農民の性格が、移動性の強い田堵であることをよく示している。この時期に力を増し、自立性を高めた建物群の農民は、国司や莊園領主の求めに応じて、より良い条件を探しながら移動する田堵として耕作を続けたのであろう。

この時期をもって、多くの竪穴建物が集中し、一握りの大きな勢力が多くの人々を集めて生産活動を行うといった古代的な集落(集村形態)のあり方は完全に転換し、荒廃した耕地や未開地の開発を、散在する各建物群を中心となって、国司や都の莊園領主と結びつきつつ、自立性を強めながら行われるようになったと考えることができよう。この時期は、集村形態をもつ古代集落が中世前期へと続く散村形態へと転換する集落形態上の大きな画期となる時期と考えられる。

(3) 11世紀前半(古代14期)・11世紀後半(古代15期)

11世紀前半では、建物数は10軒となり減少傾向は続き、1~2軒程のより少ない建物数で居住域が構成されるようになる(付図4-⑧)。また、建物群が一定の距離を置いて散在する散村形態をとっている点も、前時期の傾向を引き継いでいる。続く11世紀後半も白磁の出土した建物も加えると8軒で同様の傾向が続く(付図5-⑨)。前時期の10世紀末葉~11世紀初頭(付図4-⑦)に各地区に見られた自立性を高めて散在する建物群の農民は、田堵としての性格上、よりよい耕作条件を求めて多くがこの地から移動したといえよう。一方15・16地区周辺には10世紀末葉~11世紀初頭の建物群からの継続性が見られている。

この時期は鉄製品の出土は一定量あるものの(図15)、鐵鎌の出土は見られなくなる(図10)。建物面積も前時期に比べて縮小傾向が顕著である(図14)。前時期まで武力を蓄積し、富を守り、拮抗する勢力に対して優位を維持するように努めていた建物群の性格が、この時期を境に、武力を保有せずに生産活動を進める形態に変わった可能性が考えられよう。富の減少を伴う建物群の弱小化が指摘でき、その性格は、ごく小さな田堵、あるいは田堵になれば田堵の従者や田堵に雇われて耕す農民の可能性もあるろう。

一方、15・16地区周辺には10世紀末葉~11世紀初頭以降、建物の継続性が見られる。特に11世紀前半の

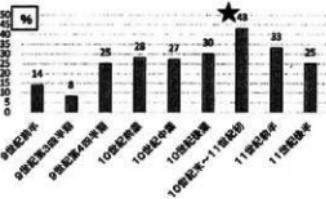


図15 鉄製品(鉄鎌除く)
の全遺構に対する保有率の時期別変化

S B 7（付図4-⑧）の面積は51.64m²と大きく、移動性の強い田堵ではありながら、ごく小さな規模の私領主や別名の領主等の性格も合わせ持っていた可能性もある。

（4）11世紀末葉以降（古代15期より後）

堅穴建物や古代の土器から南宮遺跡の消長が追えるのは前時期までである。南宮遺跡からは中世の遺物はわずかに見られるものの、中世集落は検出できないことから、遺跡そのものは11世紀末葉をもって消滅したと言える。

ただし、文献では12世紀後半に川中島扇状地には富部御厨と布施御厨という二つの伊勢神宮領の御厨が開発されていたことが分かっている。また、11世紀末頃、左衛門大夫平正家が信濃国内に所領を持ち、正家の甥である平正弘は信濃に4ヵ所の所領を持ち、その子は現地に土着して布施惟俊となり、孫は信濃の住人富部家俊で、共に布施御厨、富部御厨の地を名字とした武士となっている。そして、家俊の郎等には杵渕小源太重光があり、杵渕は川中島扇状地に地名として残っている。（註11）

11世紀末葉以降、川中島扇状地には間違いなく在地領主が成長し、そこは彼らが活動する舞台となっていた。南宮遺跡は11世紀末葉には消滅するが、その地は文献に現れた布施惟俊、富部家俊、杵渕小源太重光の様な在地領主のもとで、布施御厨・富部御厨内の一帯として生産活動が行われた地として、後世へと継続していったのである。

註1 長野市教育委員会 1992 「南宮遺跡」

長野市教育委員会 2000 「南宮遺跡II（第一分冊）」

長野市教育委員会 2001 「南宮遺跡II（第二分冊）」

長野市教育委員会 2002 「南宮遺跡II（第三分冊）」

鳥羽英繼 2005 「南宮遺跡に発見された古代の神社」『長野県考古学会誌』109号

鳥羽英繼 2006 「古代における川中島扇状地の開発」『長野県考古学会誌』114号

鳥羽英繼 2007 「古代集落 南宮遺跡の分析1 ～金属製品・金属生産関連の遺構・遺物の分析を通して～」『長野県考古学会誌』122号

鳥羽英繼 2009 a 「古代における豪族居宅の構造 ～長野市南宮遺跡の分析を通して、南宮遺跡の分析2～」『長野県考古学会誌』127号

鳥羽英繼 2009 b 「南宮遺跡と古代の豪族居宅」『ちょうま』第29号 更埴郷土を知る会

鳥羽英繼 2021 「南宮遺跡における豪族居宅の出現と変遷」『市誌研究ながの』第28号

鳥羽英繼 2022 「南宮遺跡における集落構造 ～集落最盛期の10世紀中葉、祭祀の器等に視点をあてて～」『市誌研究ながの』第29号

鳥羽英繼 2023 「南宮遺跡の消長と歴史的特質」『市誌研究ながの』第30号

今回報告の調査内容は含まないが、南宮遺跡の消長については鳥羽2023により詳しい。本稿の大筋はそれに沿ったものである。

註2 黒岩範臣 2002 「「戊の渓水」を歩く」から引用

註3 鳥羽2023ではこの墓の被葬者は南宮遺跡の形成に大きく関わりを持った有力者と位置付けたが、その後の検討で、この墓から「幼児の歿」が出土しているという記載が、報告書第一分冊P285「土坑墓観察表」にあることを発見した。幼児の歿があるとすると、当時は7歳以下の子は墓に埋葬されず、天皇の子であっても風葬されるのが常であったため（勝田至

2003)、異常死者の墓である可能性も出てくる（桜井秀雄 2008）。したがって、この墓の被葬者の性格については、現時点では見解を保留しておきたい。ただ、もしこの墓が有力者またはその系譜につながるもの墓であったとしても、その後更に集落が大きく成長する9世紀第4四半期から10世紀中葉の有力者の墓は遺跡内には見つかっていない。特に遺跡最盛期の10世紀中葉の有力者の墓は、もっと大きく、副葬品も豪華なものであろうと推定されるが、そのような遺構は見つかっていない。南宮遺跡の有力者の墓はどこにあり、どんなものであったのかは今後の大きな検討課題である。

勝田至 2003 『死者たちの中世』 吉川弘文館

桜井秀雄 2008 「古代における「横死者」の墓－長野市松原遺跡の土坑墓SK1226の被葬者をめぐって－」『信濃』第60卷第11号

鳥羽英継 2023 前掲註1

註4 前掲註1 鳥羽 2021

註5 前掲註1 鳥羽 2006

各時期の全体図に引いてあるラインは、この時期の空白帯を基準にしたものである。

註6 前掲註1 鳥羽 2022

註7 前掲註1 鳥羽 2005・2009 a 付図6として分割された居宅内の空間と、その機能を示した。

註8 前掲註1 鳥羽 2007・2009 a・2022

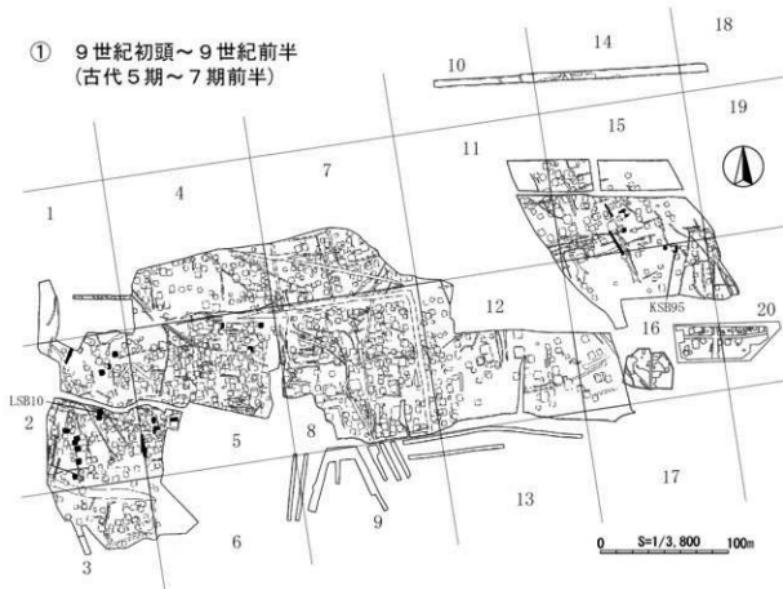
註9・10 前掲註1 鳥羽 2022

註11 井原今朝男 1989 「第5章第4節 信濃武士の登場」『長野県史 通史編 第一巻 原始・古代』

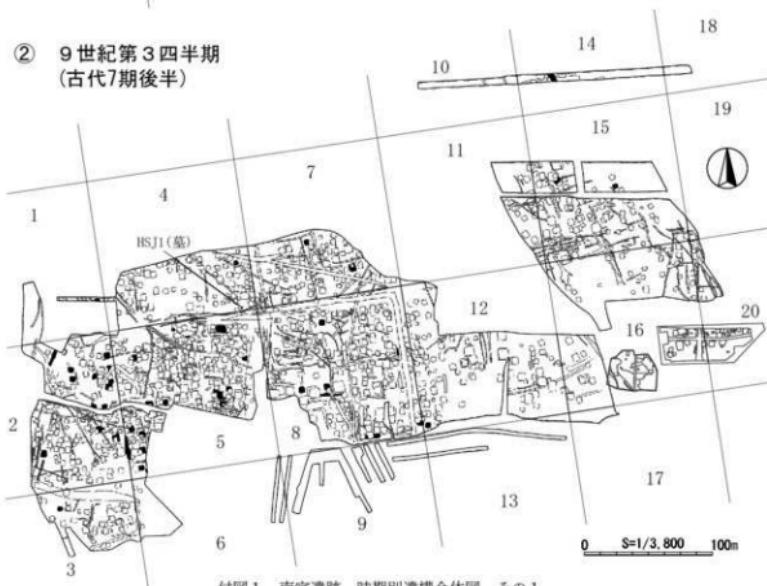


写真3 調査地遠景

① 9世紀初頭～9世紀前半
(古代5期～7期前半)

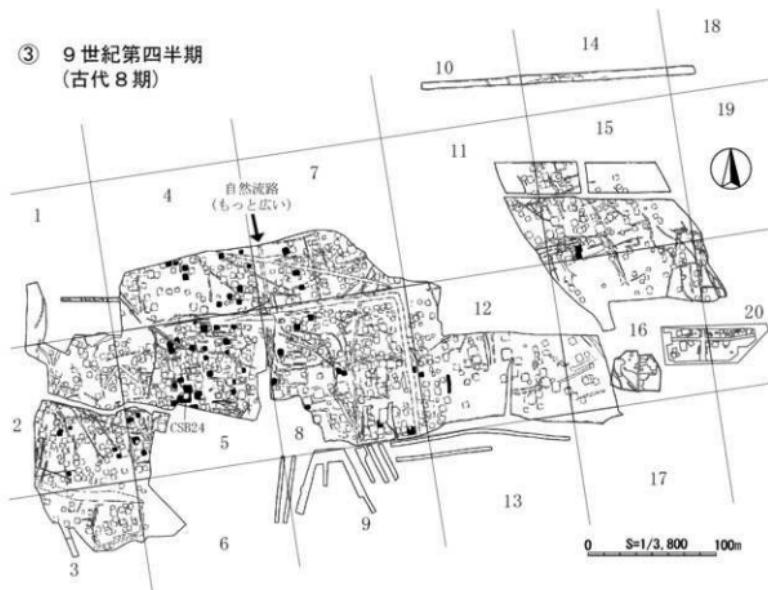


② 9世紀第3四半期
(古代7期後半)

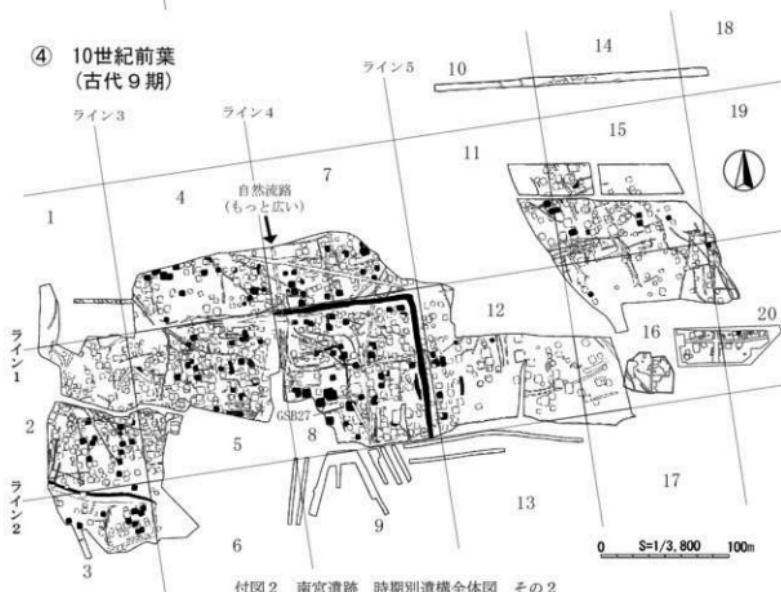


付図1 南宮遺跡 時期別造構全体図 その1

③ 9世紀第四半期
(古代8期)

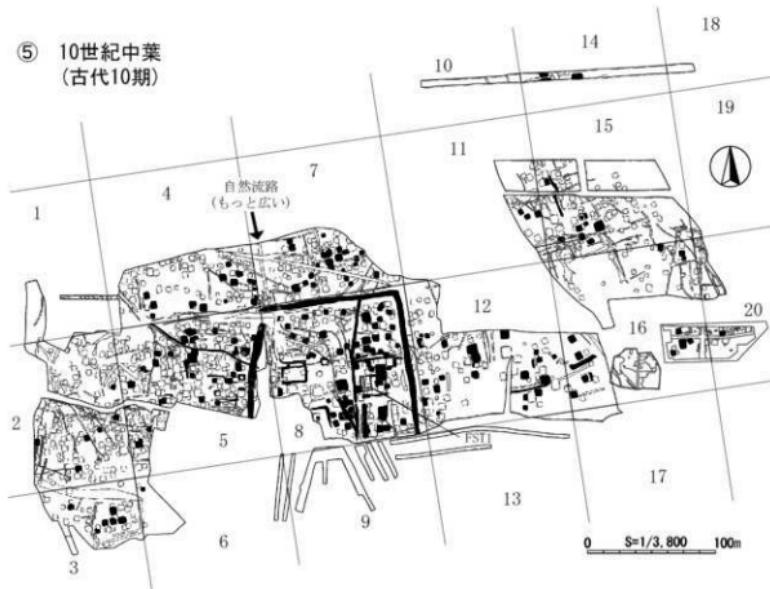


④ 10世紀前葉
(古代9期)

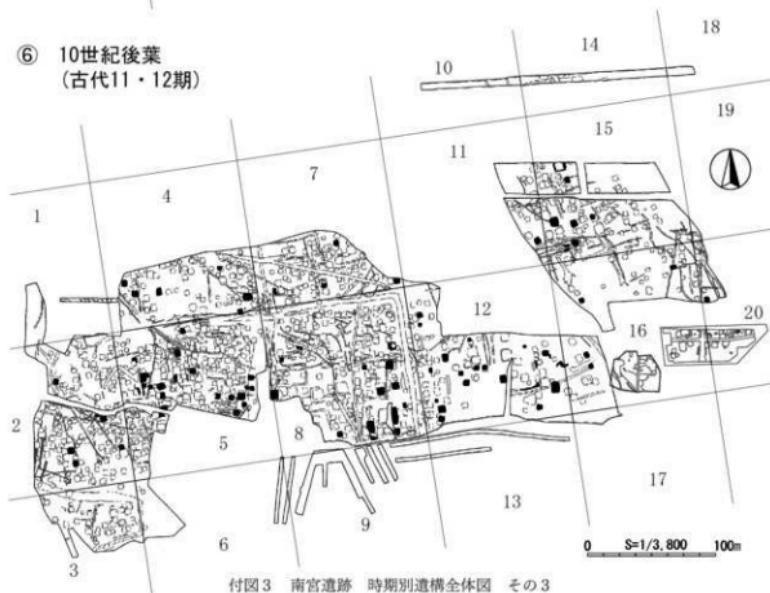


付図2 南宮遺跡 時期別造構全体図 その2

⑤ 10世紀中葉
(古代10期)

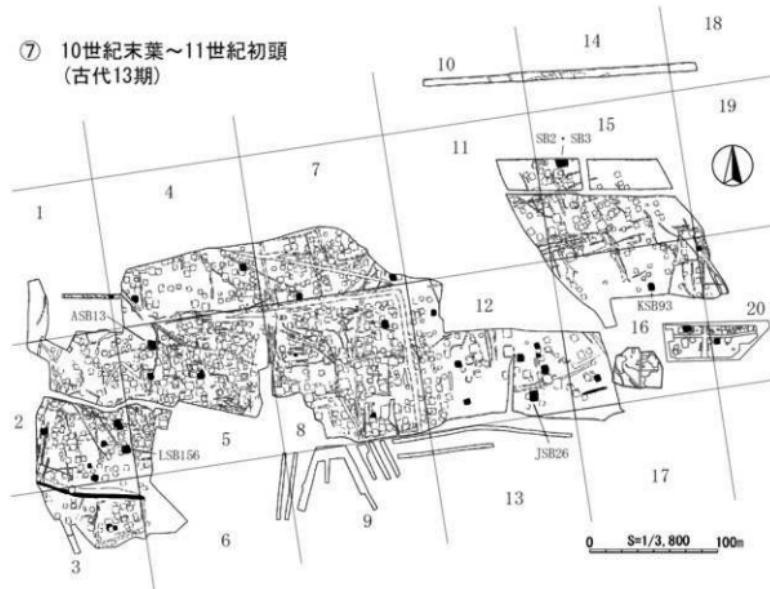


⑥ 10世紀後葉
(古代11・12期)

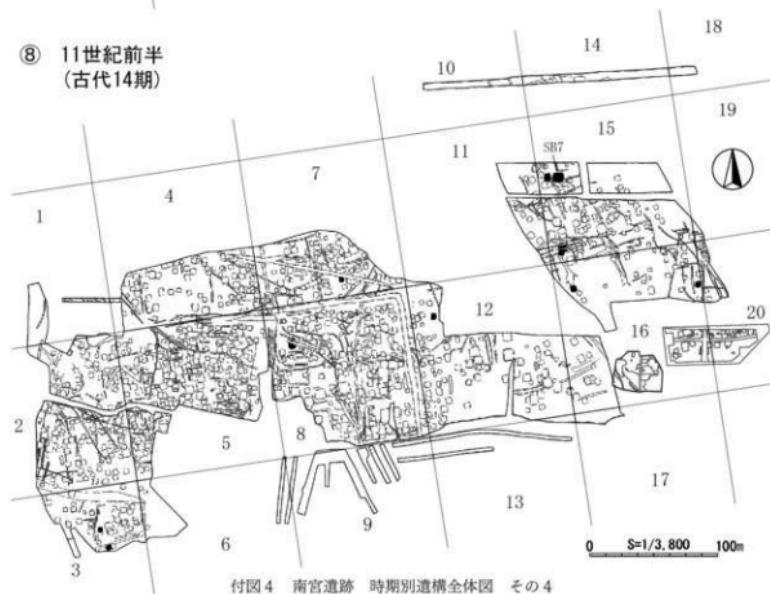


付図3 南宮遺跡 時期別造構全体図 その3

⑦ 10世紀末葉～11世紀初頭
(古代13期)

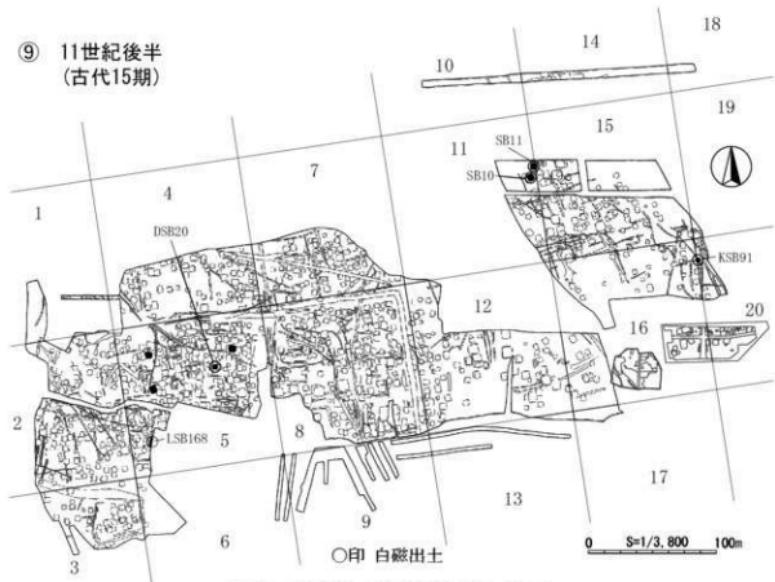


⑧ 11世紀前半
(古代14期)



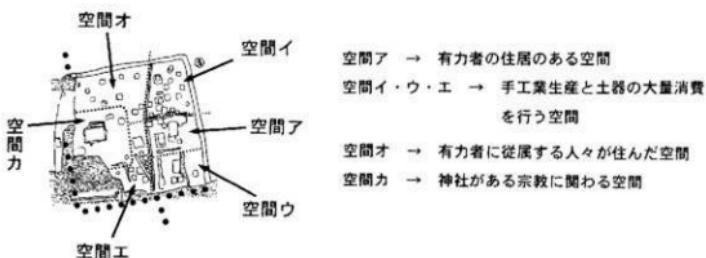
付図4 南宮遺跡 時期別造構全体図 その4

⑨ 11世紀後半
(古代15期)



付図5 南宮遺跡 時期別遺構全体図 その5

※ 今回調査分の全体図をこれまで報告分の全体図と合成了時、これまで報告分の調査区の位置関係に若干のズレが認められたため、修正を行った上で今回の付図1～5を作成した。ラインの近くに位置する堅穴建物で15地区に位置したもののが11地区に変更となったもの等が若干見られるが、これまでの考察に大きな影響をおよぼすものではない。



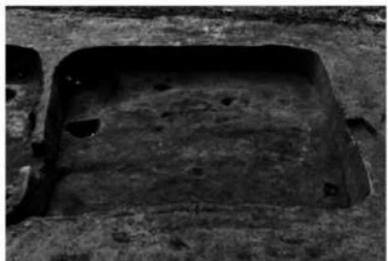
付図6 居宅内の分割された空間（空間ア～カ）とその機能（10期・10世紀中葉） P31註7の補足



1号住居址



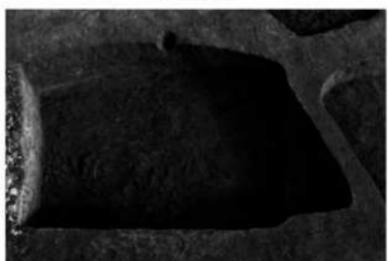
1号住居址カマド



2号住居址



2号住居址カマド残欠



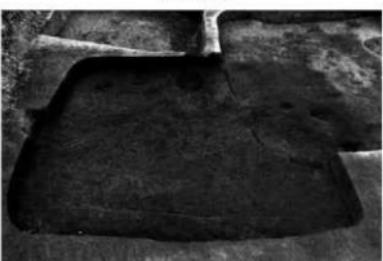
3号住居址



4号住居址



4号住居址土器出土状況



5号住居址



6号住居址



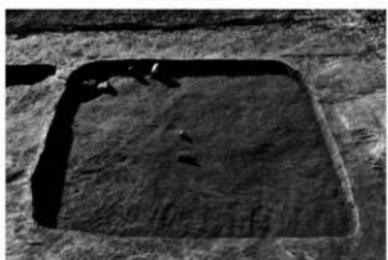
7号住居址



7号住居址カマド



8号住居址



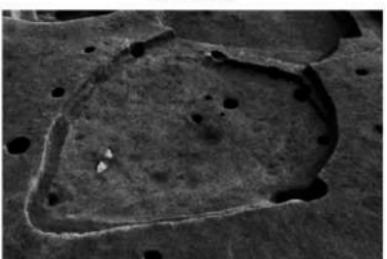
9号住居址



10号住居址



11号住居址



12号住居址



13号住居址



13号住居址カマド



15号住居址



北側スタンド地点



北側スタンド地点



メインスタンド地点



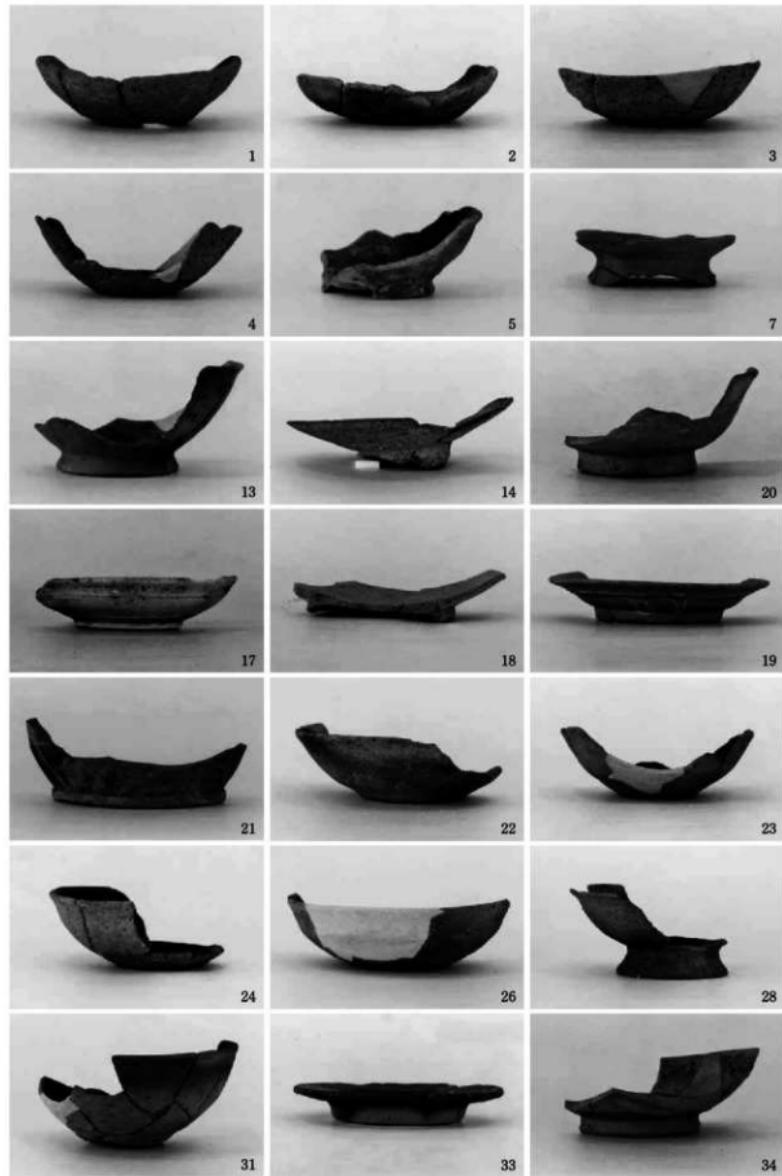
調査風景

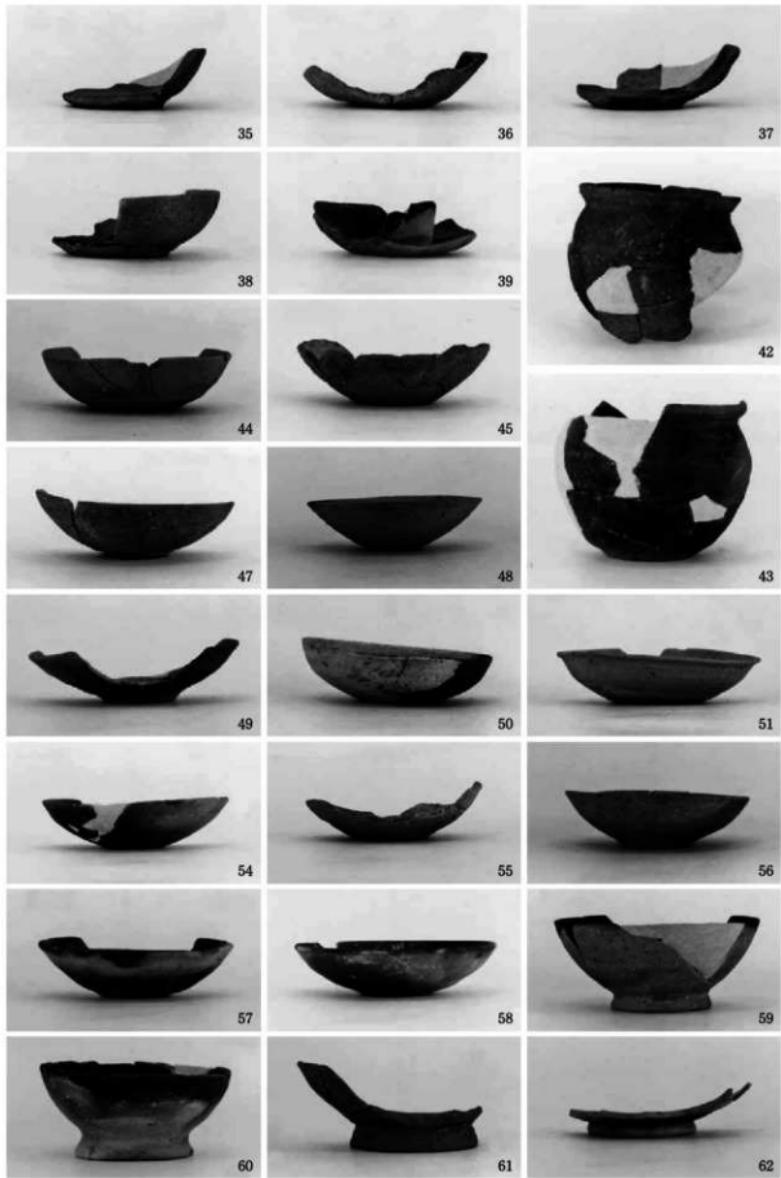


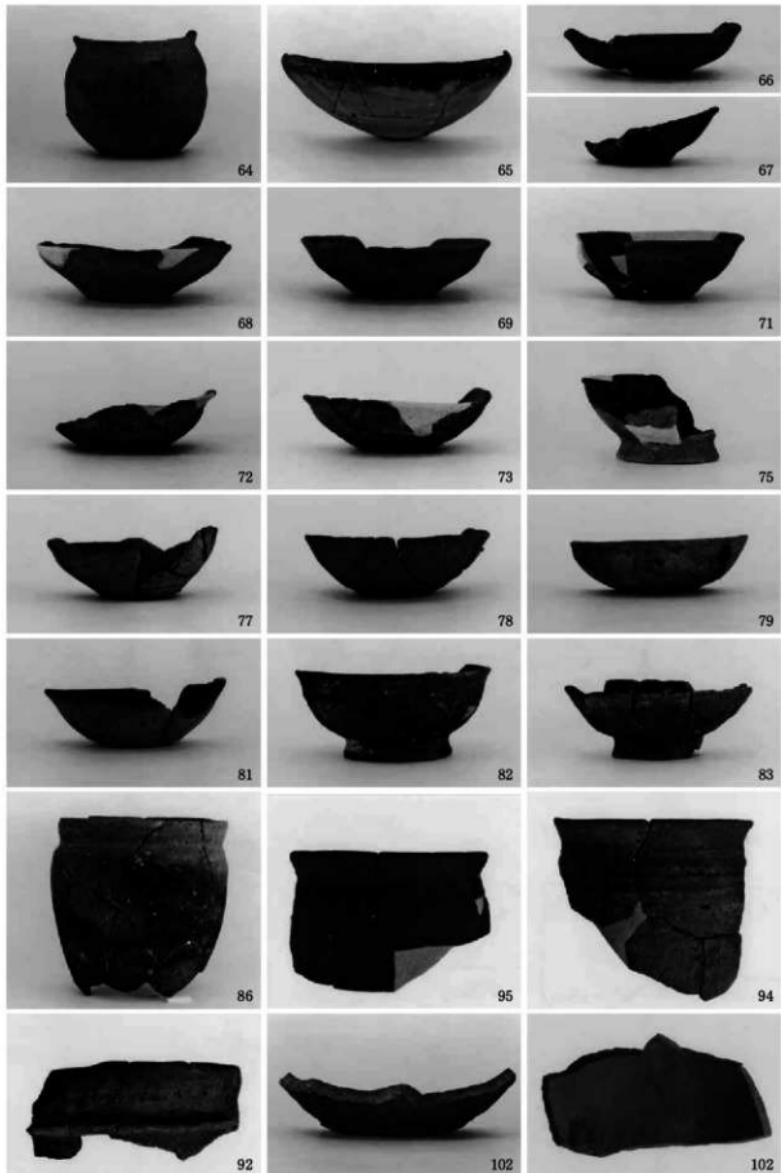
調査風景

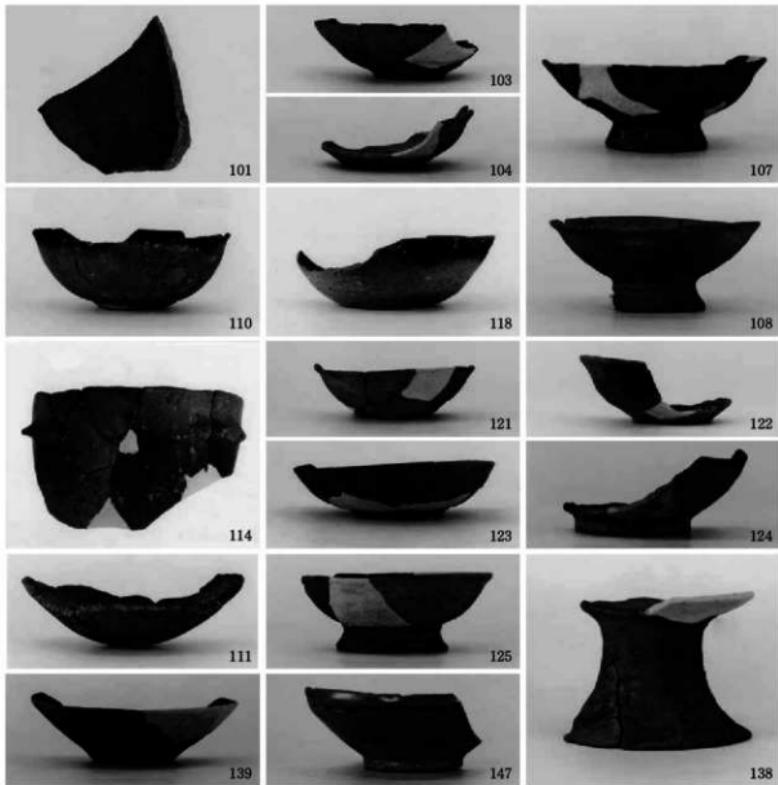


調査区全景（右が北）









報告書抄録

ふりがな	なんぐういせき さん
書名	南宮遺跡 III
副書名	南長野運動公園総合球技場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第 171 集
編著者名	千野 浩 青木一男 烏羽英継
編集機関	長野市教育委員会・長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒 381-2212 長野県長野市小島田町 1414 番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2023 年 11 月 30 日

長野市の埋蔵文化財第171集

南宮遺跡 III

令和5年11月30日 発行

発 行 長野市教育委員会
編 集 長野市埋蔵文化財センター
印 刷 社会福祉法人ながのコロニー
長野福祉工場